

---

# 遊戯王デュエルモンスターズGX StrikerS

ネロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターズGX Strikers

### 【Zコード】

Z2497T

### 【作者名】

ネロ

### 【あらすじ】

遊城十代は、ある日謎の赤い宝石を拾つた。そして突然別の世界へと飛ばされてしまった。そこは『デュエルモンスターズ』は無く、代わりに魔法が普及した世界『ミッドチルダ』だった。

## プロローグ（前書き）

遊戯王5D'sの方が少し行き詰まってしまったので、新しく始めました。

GXは書くのが初めてなので、うまく書けないかもしませんが、暖かい田で見てくれると嬉しいです。

## プロローグ

遊城十代は「デュエルアカデミア」を卒業し、風の向くまま、気の向くまま、旅を続けていた。

しかし、そんな彼の日常を大きく変える出来事が起こつた。

十代

「ん? 何だあれ?」

十代が旅を続けている途中、赤色の六角形の宝石が落ちているのを見つけたのだ。

十代はその宝石を拾い上げ、観察した。

十代

「ただの宝石じゃない……何だ! ? この宝石から流れ込んで来る異質な感じは……」

十代がそう呟いた時、十代の魂の一部であるコベルが現れる。

コベル

「十代、今すぐその宝石を捨てろッ! ! !」

コベルが叫ぶのと同時に、宝石が光り出す。

十代

「え! ?」

十代が聞き返した時には既にその光は十代を包み込んでいた。

十代

「うわああああああああああああああッ！！」

そして、十代の意識はそこで途切れた。

## プロローグ（後書き）

前書きでも書きましたが、GXは初めて書くのでうまく書けないかもしれませんが、頑張って書いて行こうと思います。

感想や、何か気付いた事、アイディアなどがあつたら書ってくれると嬉しいです！！

## 第1話 召喚！E・HERO！！ 新たな出会いーー！（前書き）

この世界でのデュエルのルール。

初期ライフポイントは8000

1：ドローフェイズのドロー、モンスターの通常召喚は一分置き。  
ただし、トラップカードの発動はセットした後でも発動条件が合えば  
すぐに発動できる。

2：自分の場の攻撃表示モンスターが破壊された時そのモンスター  
の元々の攻撃力分の数値がライフポイントから削られる。守備表示  
の場合はダメージは受けない。

何か疑問に思った事があれば質問してください。

## 第1話 召喚—E・HERO—！ 新たな出会い—！

十代  
「う……うはー？」

十代が田を見まわし、そこはさつままでいた荒野ではなく、森のど真ん中だった。

十代  
「森ー？俺はさつままで、荒野のど真ん中にいたはずなのに……」

足下に赤いラインの入ったデュエルディスクが落ちてはいたが、持ってきたバッグは置いてしまったようだった。

十代  
「バッグが見当たらない元いた場所に置いてきちまつたのかもな……まあ、デュエルディスクとテッキはあるし、何が起きてもある程度何とかなるだろ……」

十代がそう呟いた時、十代の中からゴベルが現れた。

ゴベル

「何が何となるだ……すべてあの宝石を捨てないと呟いたの……

十代

「しょうがないだろ？いきなり言われたんだ。それに、お前に言われた時にはあの宝石は光始め……」

十代が言葉を切る。

ユベル

「どうした?……ツー?」

ユベルも十代と同じ事を考えた。

十代

「この気配は……」

ユベル

「ああ……間違いないね……」

十代&ユベル

「敵……」「

ユベルが十代の中に姿を消すと同時に、周りの茂みから、カプセルのよつな形のロボットが数体現れた。

十代

「何だー?」  
「つは……」

ユベル

「(そんな事はどうでもいい。この状況をひっくり返せば、戦うしか無いーー)」

十代

「わかつてゐーー!」

十代の右目がオレンジ色に、左目が緑色に変わる。

十代はこの力を使つことで精靈を実体化せらる事がでせるのだ。

十代  
「行くぞ！！」

十代は左腕の『デュエルディスク』を展開させる。

十代  
L.P.8000

十代  
「俺のターン！！」

十代はカードを一枚引いた。

十代  
「（手札は……融合があるが、素材が足りない……）なら、来い、  
E・HEROスパークマン！」

十代がスパークマンのカードをセットすると、十代の前に、青と金色を基調としたバイザーを付けたヒーローが現れた。

十代  
「行くぜ！スパークマン、奴らを攻撃だ！！」

スパークマンが右手を突き出し、ロボットに向けて電撃『スパークフラッシュ』を浴びせる。

その攻撃を察知したロボットは散開するが、逃げ遅れたロボットは『スパークフラッシュ』受けて、爆発した。

十代

「まだまだ行くぜーー！手札のE・HEROのFHザーマンを攻撃表示で召喚ーー！」

十代がFHザーマンのカードをセットするが、FHザーマンは現れなかつた。

十代

「FHザーマンが出ない？」

ユベル

「（どうやら、新たなモンスターを召喚するには、何か条件があるみたいだな……）」

十代の隙を見てロボットが田のよしの器面からビームを発射する。

ビームはスパークマンを直撃し、スパークマンは破壊された。

十代

「ぐああッーー！」

十代 LP80000 - 16000 = 6400

十代

「ライフが……スパークマンが破壊されたから、スパークマンの攻撃力分の数値が、俺のライフから削られるのか……」

十代が身構えた時、デュエルディスクにセットされているデッキの一番上のカードが光り始めた。

十代

「これは、ドローできるってことなのか?」

十代がそのカードを引く。

十代

「（よし、カードは引けた。さつきカードを引いてからの感覚は、一分前後ってところだな。ここじゃ、ドローは一分置きってことか? ならツ……）今度こそ、フュザーマンを攻撃表示で召喚……」

十代がカードをセツトすると、背中に白い翼を生やし、左腕にかぎ爪を装着したヒーロー、フュザーマンが現れた。

十代

「（やつぱり、モンスターの通常召喚も一分置きってことか……掴めてきたぜ、この世界での戦いが）行け! フュザーマン! ……」

十代が指示を出すと、フュザーマンはロボットに一体に飛びかかる。

しかし、フュザーマンの攻撃力が低いためか、傷を付ける事は出来たが破壊は出来ず、弾き飛ばされてしまった。

十代

「カードを一枚伏せて……」

十代の攻撃が停まったのを見計らって、ロボット達は一斉に射撃を始める。

十代

「トラップ発動! ……ヒーローバリア! ……」

十代が宣言すると、フュザーマンの手の前に、見えないバリアが現れ、攻撃を防ぐ。

十代

「(テッキが光った-) ドローーーー！」

十代はドローしたカードを微笑む。

十代

「魔法カード『融合』を発動！！手札の『E・HEROヒジマン』と、『E・HEROワイルドマン』を融合させ、『E・HEROワイルドジャギーマン』を攻撃表示で召喚ーーー！」

十代の前に左腕に金色のガントレットを装備し、右手には十代の身長を軽く超える大剣を持ったヒーローが現れた。

十代

「ワイルドジャギーマンは、相手モンスター全てに攻撃できるーーー！行け！ワイルドジャギーマンーーー！」

ワイルドジャギーマンが大剣を振りかざし、残りのロボットを全て破壊する。

十代

「ふう……もう出でこないよつだな……」

ユベル

「(まだ終わっていないぞ……)」

ユベルが十代に忠告する。

十代  
「え？……ツ！？」

十代は気配のする方を向いた。

十代が向いた方向は空。そこには白い服を着た茶髪をツインテールにしている女性が左手に杖を持って浮いていた。

？？？

「あなたは……一体！？それにそのガジェットは……！？」

十代  
「ガジェット！？」

？？？

「そこに壊れてバラバラになっているロボットの事です。あなたが壊したんですか？」

十代

「まあ……そう言つ事になるな……でも、俺は悪くないぜ？・襲つてきたのはあつちなんだからな」

？？？

「いえ、私達もガジェットを殲滅するためにここに来たので……」

十代

「じゃあ、あんたは敵じゃないってことか？」

？？？

「あなたに敵意が無ければ、そつなります」

女性は地面に降りながら十代に告げる。

十代

「あなたの名前は？俺の名前は遊城十代だ」

十代

「私は『時空管理局機動六課』所属の高町なのは一等空尉です」

十代

「何か長いな……じゃあ、なのはって呼んでいいか？」

十代

「じゃあ、私は十代ちゃんって呼ぶ事にしますね」

十代

なのは

「それで、十代さん『まじ』から来たんですか？」

十代

「俺？地球から……つてことは『まじ』だよ？円はひとつあるし、いきなり森に来ちまつたから焦ったぜ……」

十代

「ここがどこだかわからなって事ですか？」

十代

なのは

「やつなるな……」

なのは

「もしかして、十代さんは『次元漂流者』かもしだせん……」

十代

「『次元漂流者』……？」

なのは

「簡単に説明すると、別の世界から来た、迷子って感じです」

十代

「迷子ねえ……それで、俺はこれからどうなるんだ？」

なのは

「やつですねえ……とつあえず、ウチで保護する事にしまじょうか

？」

十代

「いいのか？助かるぜ……」

こつじて十代は機動六課に保護される事になつたのだった。

## 第1話 召喚！E・HERO！！ 新たな出会いーー！（後書き）

十代

「いきなり呼ばれたんだが……何だ？この紙……」

ガサガサ

十代

「何何？』この世界での遊城十代のデッキの解説』！？ つたく、何の意味が……まあいいか。俺のデッキはアニメで出てきたカードを中心には漫画登場カードとオリカを絡めたデッキになるらしいぜ？まあそれがどう生かされるのかは作者の腕次第ってことだな。もういいだろ？俺も暇じゃねえからな。ガツチャ！！」

## 第2話 機動六課での出来事ー 対決ーシグナムVS『E・HERO』ーー(前)

詰め込み過ぎた感がハンパないです……

分割すれば良かったかも……

## 第2話 機動六課での出来事ー 対決ーシグナムVS『E・HERO』ー

十代

「EJJが機動六課か……」

機動六課に案内された十代は六課の宿舎を見て、驚いていた。

なのは

「じゃあ、取りあえず、部隊長の所へ案内しますね」

十代

「あ……ああ」

なのはに案内されて十代は部隊長室への道を歩いていた。

ユベル

「（何か、面倒な事になつたね……）」

十代

「（まあ、やつぱりなつて。ここに来て行く宛も無えし……）」

ユベル

「（君ならそつぱりと想つてたけどね。じゃあ、しばりく僕は表に出でになつよ）」

十代

「（何でだよ？）」

ユベル

「（僕を見た奴らが君を敵と勘違いされると面倒だからね、余程の事が無い限りは出てこないようにするよ）」

十代

「（ああ、わかった）」

なのは

「十代さん？」

と、不意に声をかけられた。

十代

「え？ ああ……どうした？」

なのは

「どうしたって……着きましたよ？」

十代

「ああ……そうか」

なのは

「失礼します」

なのはは一言挨拶すると、部屋の中に入つて行つた。十代もそれに続いて部屋に入る。

？？？

「ああ、なのはちゃん。待つとつたよ」

十代達を迎えたのは茶髪をショートカットにした女性だった。

？？？

「で、こいつが報告にあった次元漂流者の……」

十代

「遊城十代だ。よろしくな。ええと……」

はやて

「ああ、自己紹介がまだやつたな。私の名はハ神はやて。ここ機動六課の部隊長やってます」

十代

「へえ～」

十代達が互いの自己紹介を終えた所に、部屋の扉が開き、三人の女性が入室してきた。

？？？

「失礼します……あつ、あなたが次元漂流者の……」

と、長い金髪の女性が十代に問う。

十代

「ああ。遊城十代だ。よろしくな

フェイト

「フェイト・T・ハラオウンです。こいつらによろしく

シグナム

「ヴォルケンリッター烈火の将シグナムだ」

ヴィータ

「ヴォルケンリッター 鉄槌の騎士ヴィータだ。後、シャマルとザフ  
イーラつてのがいるけど今はちょっと出掛けてる

と、シグナムとヴィータが自己紹介をする。

はやて

「さて、十代君のいた世界の事だけど、調べてもデュエルアカデミ  
ア何で学校は無いし、デュエルモンスターZなんて物も知らないつ  
て言う報告しか無かつたんや……」

フェイト

「つまり十代は私達の知ってる地球とは別の地球から来たって事?」

十代

「なるほどな。パラレルワールドつてやつか……」

なのは

「帰る方法も無いみたいで……」

十代

「ふうん」

十代は部隊長室のソファに座る。

ヴィータ

「ふうんつて、お前、自分の置かれた状況理解してるとかよーー。」

ヴィータが怒鳴る。

十代  
「わかつてゐるや。帰れないんだろ？」

十代が当然のようご回答する。

十代

「そりゃあ、元の世界の事は心配だナゾよ……」

はやて  
「だけビッヘ。」

十代

「魔法の世界なんてすつげえワクワクするじやないかーー！」

一同

「「「「「ナニー？」」「」「」「」」

十代

「魔法だぜ？魔法ーー俺一度でいいから魔法使いに会つて見たかつたんだよなあーー！」

……

はやて

「じゃあ、十代君は機動六課に協力してくれるつてことでええんか？」

十代

「ああ、いいぜ」

あれから十代は「」の世界の事やわざを戦つたロボット（ガジェット）ドローン）の事などを聞いた。

はやて

「それと、一回テストさせてくれんかな？」

十代

「テスト？」

はやての言葉に十代が聞き返す。

はやて

「うん。十代君の魔導師ランクはAAA。実はこれって結構高いねんな。そこで、うちの訓練所を借りて、精密に検査したいねん。ええかな？」

十代

「つまり、俺と戦つてことか？」

はやて

「まあそういう事や」

シグナム

「主、その役目、どうか私に」

はやて

「シグナム？十代君に怪我させたらあかんよ？」

シグナム

「はい。遊城、先に行っているぞ」

十代

「ああ

訓練場では、十代とシグナムが向かい合っていた。シグナムは騎士甲冑を装備し、右手には薙刀『レヴァンティン』が握られていた。

十代

「いつでもいいぜ」

十代がモニターに映っているのは達に告げる。

シグナム

「同じく、いつでもいける」

シグナムがレヴァンティンを構える。

なのは

『勝負方式は1対1のガチンコ勝負、相手を戦闘不能にすれば勝ちね』

訓練場になのはの声が響く。

シグナム

「ああ！行くぞ遊城！！」

十代

「ああーー！」

十代は「テュエルディスクを展開せん。

十代

「ドローー！ 来い！ E・HEROワイルドマンー！」

十代がカードをセットすると、上半身裸の褐色の肌のヒーローが大剣を構えて現れる。

シグナム

「召喚獣の召喚か……面白いー。」

シグナムがレヴァンティンを構え、ワイルドマンに向かって行く。

十代

「行け！ ワイルドマンー！」

ワイルドマンも、大剣を構えシグナムに向かって行く。互いの剣が衝突し、火花を散らす。

シグナム

「中々の攻撃だ……だがーー！」

シグナムがワイルドマンの剣を弾き、ワイルドマンの体勢を崩す。

シグナム

「はあッー！」

シグナムの攻撃でワイルドマンが破壊される。

十代

「ぐああッ！！」

十代 L P 80000 - 15000 = 65000

十代

（泪ぬしたら） 一瞬でやられる……！」トロード魔法力＝トロード魔法力＝

はやて

## 「融合？」

モニターで見ていたはやてが首を傾げる。

十代

「番組の「エコサーマン」とハーストレイターを露骨に！出でよ！田・上田・ロフレイム・ウイングマン！！」

十代の目の前に右腕がドラゴン、左からには白い翼を生やしたヒー  
ローが現れる。

フエイー

## 「召喚獣が融合した？」

ヴィータ

「あんなの、今まで見た事ねえぞ！？」

なのは

「それに、あの召喚獣、さつき融合する前の2体より魔力が桁違いに高い。融合前はランクBだったのに、あの召喚獣のランクはAA」

はやて

「召喚獣を融合させて戦つのが十代君の戦闘スタイルみたいやな」

はやて達が十代を分析する。

シグナム

「召喚獣を融合せるとほな……遊城、お前は面白い奴だ」

十代

「行くぜー！フレイム・ウイングマン！…『フレイムショート』！…

フレイムウイングマンが右腕のドラゴンをシグナムに向け、炎を発射した。

シグナム

「くつ！？」

シグナムが何とかフレイムウイングマンの攻撃を避けようとするが、炎の大きさが予想より大きかったため、騎士甲冑をかすめる。

十代

「カードを一枚伏せる」

シグナム

「（今の一撃、何とか避けたが……次に攻撃されたら後が無い……  
ならばッ！）レヴァンティン！」

レヴァンティン

『シュランゲフォルム！』

レヴァンティンからカートリッジをロードし、レヴァンティンを連  
結刃にする。

十代

「何だ！？」

突然の事に十代が驚く。

シグナム

『飛竜一閃！』

フレイム・ウイングマンは攻撃を避けようとしたが、不規則な動き  
に翻弄され、破壊されてしまった。

十代

「うわあああッ！？」

十代 LP6500 - 2100 = 4400

十代

「流石に効いたぜ……だが、フレイム・ウイングマンの犠牲は、新  
たなヒーローを呼び覚ます！トラップ発動！『ヒーロー・シグナル』  
！！」

十代の場に伏せてあつたカードが開き、ヒーローの『エ』と『ア』の文字を浮かべたシグナルが現れる。

シグナム

「何だこれは！？」

シグナムがレザンティンを構えながら問う。

十代

「ヒーローシグナルは、自分の場のモンスターが破壊された時、手札かデッキからレベル4以下の『E・HERO』を一体特殊召喚できる！来い！フォレストマン！』

シグナルが消え、代わりに右半身が樹になつてているヒーローが現れる。

十代

「ここからが俺の反撃だ！ドロー！…フォレストマンの効果発動！』

「！」

フォレストマンの体が緑色に光る。

十代

「この効果によりて、俺はデッキか墓地から、『融合』を手札に加える！」

十代はデッキから融合を手札に加える。

十代

「！」

「そりに、E・HERO!アーマンを召喚…。」

十代の場にプロペラを付けた翼を生やしたヒーローが召喚される。

十代

「エアマンの効果発動!!召喚時、デッキから『HERO』と名の付いたモンスター一体を手札に加える!俺はE・HEROオーシャンを手札に加える!!」

シグナム

「そんな召喚獣をいくつ並べても、私には勝てんぞ…。」

十代

「慌てるなって。俺のヒーローコンボを見せてやるぜ!魔法カード『融合』を発動!!手札のオーシャンと場のフォレストマンを融合!来い!E・HERO!ジ・アース!!」

フォレストマンとオーシャンが融合し、白い体のヒーローが召喚された。

十代

「ジ・アースの効果発動!!場の『E・HERO』を生け贋にする事で、そのモンスターの攻撃力と守備力を吸収できる!!」

シグナム

「召喚獣を生け贋にするだと…。」

エアマンがジ・アースに吸収され、姿を消すと同時に、ジ・アースの体はマグマのような色に変色する。そりに手にはマグマが噴射したような剣を一本持っていた。

なのは

「魔力、推定S+?」

フェイト

「そんな……」

はやて

「そんな召喚獣を一瞬で呼び出すなんて……」

ヴィータ

「何なんだよ、あいつは……」

モニターで見ていた四人も驚きを隠せなかつた。

十代

「行け！…ジ・アース！…」

ジ・アースが剣を構え、シグナムに向かつて行く。

シグナム

「面白い…！ならば、私も自分の全ての全力をこの一撃に注ぎ込む！…」

十代

「アースマグナスラッシュ…！」

シグナム

「飛竜一閃ツ…！」

互いの剣がぶつかり合い、巨大な爆発を起こす。

爆発が收まり、シグナムの姿が現れた。騎士甲冑は所々破れ、レヴァンティンもボロボロだったが、何とか攻撃を押さえたようだった。

十代

「さすがだな、シグナム……俺の攻撃を受けきるとはな……」

ジ・アースは力を使い果たしたのか、体の色は元に戻っていた。

シグナム

「お前の攻撃は受けきつたが、こちらも攻撃するだけの力は無い。それはお前も同じだろ？ならば、この勝負は引き分け……」

十代

「いいや、この勝負、俺の勝ちだぜ？」

シグナム

「何！？」

十代

「速攻魔法、『融合解除』！融合モンスターの融合を解除し、融合素材モンスターを場に特殊召喚する！…」

ジ・アースが消え、フォレストマンとオーシャンが現れる。

シグナム

「何！？」

十代

「行け！フォレストマン、オーシャン！…」

フォレストマンとオーシャンがシグナムに向かって行くが……

はやて

『そこまでッ！…』

訓練場に響いたはやての声によつてフォレストマンとオーシャンは消えた。

はやて

『十代君の実力はよく分かつた。ええな、シグナム？』

シグナムは十代を一目見た後、モニターに映つてはやてを見た。

シグナム

「はい、この勝負、リミッターが付いていはるとはいへ、私の敗北です」

モニターで見ていたなのは達は驚いていた。

シグナムは管理局の中でもそれなりに名があるベルカの騎士だ。いくら制限があるとはいへ、敗北寸前にまで追い込んだ十代は隊長陣と同じかそれ以上の実力があるということになる。

シグナム

「今回は私の負けだが、次は勝つ」

十代

「望むところだ」

こうして、模擬戦の結果は十代の勝利という形に終わった。

## 第2話 機動六課での出来事ー 対決ーシグナムVS『E・HERO』ー (後)

戦闘シーンはテコノルシーンと違つて勝手が違つて難しい……

ネオスやネオスペーシアンの出来事はいつもと先になつたのです

……

### 第3話 新たな邂逅！フォワードメンバー！！（前書き）

今回は戦闘シーンはあつません。

### 第3話 新たな邂逅！フォワードメンバー！！

十代  
「ん……朝か？」

窓から差し込む朝日で十代が目を覚ます。

十代は今、六課が用意してくれた部屋で寝泊まりしている。

昨日の模擬戦の後、十代が寝泊まりする部屋を用意してくれたのだ。

部屋はそこそこ広く、生活する分には、十分な広さだった。

ハネクリボー  
「クリクリ～」

ハネクリボーが姿を現す。

十代

「よう、ハネクリボー。この世界で会うのは初めてだな」

ハネクリボー  
「クリ～」

ハネクリボーはそう言つと、部屋から出て行つた。

十代

「おい、どこ行くんだよ、ハネクリボー！？」

十代は急いで着替え、ハネクリボーの後を追った。

ハネクリボーが来たのは昨日十代が模擬戦をしていた場所だった。

十代

「おい、ハネクリボー。こんなところに何のようだよ？誰もいないぜ？」

ハネクリボー

「クリ〜」

ハネクリボーが指指す方向を見ると、シグナムが眼鏡をかけた女性とモニターを見ているのが見えた。

十代

「よお、シグナム」

十代がシグナムに声をかける。声をかけるのと同時にハネクリボーは姿を消した。

シグナム

「ああ、遊城か。随分早いな」

十代

「シグナムだつて人の事言えないだろ？」

十代が訓練場に目を向けると、なのはが3人の少女と一人の少年を相手にしているのが見えた。

十代

「あいつ等は？」

シグナム

「ああ、あいつ等はなのはの教え子だ。一人前にするために出動時以外はいつも訓練をしている」

十代

「あの2人も戦っているのか？」

シグナム

「エリオとキャロの事か？2人は幼いとはいえ、局員だからな」

十代

「ふうん」

と、十代は訓練場をしばらく眺めていた。

十代

「で、そつちは？」

十代がシグナムの隣にいる女性を見ながら聞いた。

シャーリー

「あつ、自己紹介してませんでしたね。私の名前はシャリオ・フィーノって言います。シャーリーって呼んでください」

十代

「ああ。もう聞いてるかもしれないけど俺の名前は遊城十代だ。よ

るじくなシャーリー「

シャーリー

「ニードルアーマー

十代とシャーリーは握手をする。

シャーリー

「それにしても、十代さんのデバイスは変わった形をしてますねえ。カードを使って召喚獣を召喚したり、召喚獣同士を融合させたり…

…

シャーリーがモニターに記録してある十代の戦闘記録を操作する。

訓練が終わり、なのは達は十代とシグナムがいよいよやつて来た。

なのは

「あつ、十代。おはよう

十代

「ああ

ちなみに昨日の夜からなのは達は十代を呼び捨てで呼び、敬語を使わなくなつた。

（昨日）

十代

「なあ、さん付けと敬語やめてくれないか？何かむずむずすんだよ」

はやて

「うーん。でも十代君って私達よりも年上やろ？」

十代

「は？」

なのは

「年上の人には敬語使わないと失礼でしょ？」

フェイト

「ああ、そつか……私いきなり呼び捨てにしちゃった……『めんなさい』……」

フェイトが謝る。

十代

「いや……俺まだ18だぜ？」

なのは&フェイト&はやて

「「「え！？」」

……

はやて

「私達の方が年上やつたんか……」

「

フエイト

「年上だと思つてた……」

なのは

「ちょっと大人びてたから、てつきり……」

十代

「と、とにかく、さん付け、敬語は禁止な……」

（回想終了）

？？？

「えつと、なのはさん、そつちの方は？」

青い髪の少女が十代を見て尋ねる。

なのは

「ほら、昨日保護された人。話したでしょ？さ、みんな[口]紹介して」

スバル

「スバル・ナカジマ＝等陸士です！…よろしくお願ひします！…」

青い髪の少女、昴が元気良く口紹介する。

ティアナ

「同じく、ティアナ・ランスター＝等陸士です。よろしくお願ひし

ます」

オレンジ色の髪をツインテールにした少女が淡々と答える。

エリオ

「エリオ・モンティアルニ等陸士です……よろしくお願ひします……！」

赤い髪の少年がスバルに負けないくらいの声で自己紹介する。

キヤロ

「キヤロ・ル・ルシエニ等陸士です……よろしくお願ひします……」

エリオの隣にいるピンクの髪の少女が小さく血口紹介した。

フリード

「キュクル~」

キヤロ

「えと……」ひちま竜のフリードです……」

十代

「へえ~かわいい奴だな」

十代がフリードを撫でる。フリードも特に警戒はしなかった。

十代

「おっと、挨拶がまだだったな。もう聞いてるかもしれないが、俺の名は遊城十代だ。よろしくな」

フォアード一同

「「「「はいーー.」「」」

なのは

「さて、お互に挨拶が終わったところだなび、十代もびびりまするへ一緒に訓練する?」

なのはの間に十代が答える前にシグナムがそれを遮った。

シグナム

「ああ、遊城は、主が午前9時に部隊長室に来るようだ

十代

「え?

シグナム

「この世界での語学についての勉強だそりだ

十代

「げ……」

勉強と聞いた途端、十代の顔が引きつった。

朝食の後、十代はシグナムとヴィータに連行され、部隊長室に連れ込まれた。

十代

「おこ……お前等……痛いって……そんなに引つ張るなよ……」

ヴィータ

「無理だつて。離したらお前逃げるだろ?」

シグナム

「いりでもしないと連れて行けないからな」

三人が部隊長室に入ると、はやてが待っていた。

はやて

「やつぱり逃げようとしたんやな……」

シグナム

「はい。5回ほど逃げようとしたが、なんとか連れてこられました」

はやて

「そんなに嫌なんか? 戦闘はあんなに得意なのに」

十代

「俺、学校にいたときは筆記テストほとんど赤点だったし、ほとんど実技で取つてたからさ、勉強はしないんだよ」

はやて

「筆記ほとんど赤点つて……」

ヴィータ

「お前、ほんとはすげー馬鹿なんだな……」

シグナム

「あの時私に勝つた奴とは思えんな……」

三人が呆れる。

はやて

「まあ、じつしても始まらんし、とつとつ始めよつか」

十代

「ちえ～」

十代が渋々席に着く。

はやて

「十代の勉強はこの子が見てくれるから、仲良くするんやで?」

少女

「えっと、遊城十代さんですよね?これからお勉強を始めますよ~」

十代の前に小さな人形が飛んできた。

十代

「人形?いや、妖精か?」

リイン11

「むう～!!私は人形でも妖精でもありません!!私にはユニゾンデバイスのリインフォース?という名前があるんです～!!」

リインが顔を膨らませて怒る……が、全く怖くなかった。

十代

「悪い悪い、じゃあ、よろしくな、リインフォースーー！」

リイン

「みんな私の事をリインって呼びますから、十代さんも私をリインって呼んでくださいね？」

十代

「じゃあ、リインな

リイン

「（う……カツコ……）は……はいーーー！」

「うして十代の勉強付けの毎日が始まった。

47

（三時間後）

十代

「疲れた……」

リイン

「十代さん、飲み込みは早いですから、後、2、3週間くらいやればすぐヒリヒリ語はマスターできるようになりますよ」

十代

「あれを……後、3週間……」

リイン

「あと、逃げようなんて考えじゃダメですかからね?」

十代

「ギクシ!?

リイン

「子供じゃないんですから……」

十代とリインは訓練場に戻ってきた。訓練場にはなのはとフォード陣、シグナムと、シャーリーがいた。

なのは

「おかげで……その様子だと、みつけられたみたいだね……」

十代

「まあな……」

なのは

「じゃあ、少し体動かしてみる?」

十代

「ああ、いいぜ?少し暴れたかったところだしな……」

なのは

「じゃあ決まりね?」

なのはははわつわつと、フォアード陣の方へと向き直る。

なのは

「さて、フォワードのみんな、十代と模擬戦してみたくない？」

フォアード陣

「「「「えー?」「」「」

なのは

「さすがに4対1つて訳には行かないけど、誰か、戦つてみたいって言う人、いる?」

スバル

「はい!~!」

スバルが手を擧げる。

なのは

「じゃ、スバルに決まりね。今からお昼食べて、またここに集合。はい、解散!~!」

昼食後、十代とスバルの模擬戦が行われる事になった。

### 第3話 新たな邂逅！フォワードメンバー！！（後書き）

次回は、十代VSスバルです！！

できるだけ早く、更新したいと思います。

あ……5D, sの方も進めないと……

## 第4話 十代VSスバル！！（前書き）

VSスバル戦です。

あまり、面白みが無いような

もつと研究しないとなあ……

## 第4話 十代VSスバル！！

昼食後、十代とスバルは訓練場にて向かい合っていた。

スバル

「十代さん、よろしくお願ひします！…」

十代

「ああ、全力で来い！！俺も、手加減無しで行くぜ！…」

十代がデュエルディスクを展開させる。

なのは

『二人とも、準備はいい？』

十代

「いつでもいいぜ」

スバル

「はい！…」

なのは

『それじゃ、レディー・ゴー！…』

訓練場になのはの声が響き渡る。

スバル

「ウイニングロード！…」

スバルが青いレールのようなものを造り出す。

十代

「すげーーー！」

スバルの造り出したウイングロードを見て十代が感激する。

スバル

「十代さん、行きますーーー！」

十代

「来いーーー俺は、E・HEROクレイマンを守備表示で召喚ーーー！」

十代がカードをセットすると、十代の場に体が粘土できたヒーローが召喚される。

スバル

「これが、噂の召喚獣、カッコいいーーー！」

スバルが右腕のリボルバーナックルでクレイマンを攻撃する。

スバル

「くつーーー！」

しかし、予想以上の強度だったのか、スバルの一撃はクレイマンによって弾かれる。

スバル

「見た目通り固い、だったらーーー！」

スバルがリボルバー・ナックルのカートリッジをロードし、魔力を拳に圧縮させた。

スバル

「うおおおおッ！！」

十代

「何！？」

スバルの一撃でクレイマンが爆散する。

スバル

「やつた！」

十代

「すげー！！魔法ってそんな事も出来るのかーー！」

スバル

「はいーー！」

十代

「こりや、俺も負けてらんないな……今度は俺の番だーー！」

十代のドローしたカードは『融合』。手札は『フェザーマン』、『バーストレディ』、『スパークガン』、『融合解除』、『ヒーローシグナル』。

十代  
「カードを一枚伏せ、魔法カード『融合』！手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！來い！『E・HEROフレイム・ウ

イングマン！――

十代の場にフレイム・ウイングマンが召喚される。

スバル

「召喚獣同士が融合した！？まさか、これがシグナム副隊長を圧倒した召喚獣……！？」

十代

「行くぜスバル！行け！フレイム・ウイングマン！――」

フレイムウイングマンがスバルに向けて竜の形をした右手を突き出す。

十代

「フレイムシユート！――」

フレイムウイングマンの右手から炎が発射される。

スバル

「くつ――！」

それを見たスバルがすぐに防御壁を展開し、フレイム・ウイングマンの攻撃を防ぐ。

スバル

「（これは……想像以上にきつい……！）」

フレイム・ウイングマンの発射した炎が消える頃にはスバルの魔力は半分近く減っていた。

スバル

「（すごい！魔力を半分近く持つて行かれた……それでも！）」

十代

「（何かやるつもりか、それなら…）速攻魔法『融合解除』…」

スバル

「え！？」

十代

「フレーム・ウイングマンの融合を解除！」

フレイム・ウイングマンが消え、融合前のフュザーマン、バーストレディに戻る。

十代

「行け！ フェザーマン、バーストレディ、スバルを攻撃！！」

フェザーマンとバーストレディがスバルに向かっていく。

スバル

スバルが魔力スフィアを形成した時には、フェザーマンとバーストレイディはスバルの眼前に迫っていた。

スバル

右手で魔力スフィアを撃ち抜くと、同時に魔力砲が発射され、眼前に迫っていたフェザーマンとバーストレディは破壊された。

十代

「ぐああっーー！」

十代 L P 8 0 0 0 0 - 2 2 0 0 = 5 8 0 0

十代

「流石に効いたぜ……だが、トラップ発動！！『ヒーローシグナル』

！！

十代とスバルの間の上空に『H』の文字が浮かんだシグナルが現れる。

スバル

「何！？」

十代

「俺の場のモンスターが破壊された時、手札がデッキから、『E・HERO』と名の付いたレベル4のモンスターを特殊召喚できる！俺は、デッキから、『E・HEROバブルマン』を召喚するーー！」

十代の場に青い鎧と白いマントを着込み、右腕に水鉄砲を装備したヒーローが召喚される。

スバル

「また新しい召喚獣！？これもカッコいいーー！」

スバルが目を輝かせる。

十代

「バブルマンの効果発動！バブルマンが召喚された時、フィールドに他のカードが無ければ、カードを2枚ドローー！！」

引いたカードは『スパークマン』、『融合回収』。

十代

「俺のターン、ドローー！！」

引いたカードは『NEX』。しかし、『ネオスペーシアン』がいため、このカードは必要なかつた。

十代

「魔法カード『融合回収』を発動」！墓地から『融合』と『融合』を使用したモンスターを手札に加える！俺は、『融合』と『フェザーマン』を手札に加える

スバル

「（十代さん、すごい、カッコいい！）」

十代

「俺は『E・HEROスパークマン』を召喚ー！」

十代の場にスパークマンが召喚される。

十代

「さりにスパークマンに『スパークガン』を装備！！」

スパークマンの右手に黒い銃が装備される。

十代

「スパークガン発射！！」

スパークマンがスバルに向けてスパークガンを発射する。

スバル

「え！？」

突然の事に判断が遅れ、スバルはスパークガンの弾丸をまともに喰らってしまった。

スバル

「何これ！？体が痺れて……動けない！？」

スバルが片膝を付く。

十代

「さらに、魔法カード『融合』発動！手札の『フェザーマン』と場の『スパークマン』、『バブルマン』を融合！！現れる！『E・HEROテンペスター』！！」

スパークマンとバブルマン、フェザーマンが消え、スパークマンを思わせる青い体に、フェザーマンを彷彿させる背中の翼と左腕のかぎ爪、そして右腕にはバブルマンの水鉄砲が進化したようなキヤノンを装備したヒーローが現れる。

ティアナ

「スバルを麻痺させた後に強力な召喚獣を呼んで確実に止めをさせるようにしてる……」

エリオ

「す、す”」……」

キャロ

「……」

フォワード陣も十代の戦い方に驚いていた。

シグナム

「少々、やり過ぎな感じはあるがな……」

リイン

「やり過ぎって言つたか、鬼ですね……」

なのは

「そろそろ止めた方がいいかな?」

テンペスターがスバルに右腕のキャノンを向ける。

十代

「どうする?まだ続けるか?それとも……」

スバル

「すいません……無理です……」

スバルが白旗を擧げる。

こうして、十代とスバルの戦いは、十代の勝利と言つ形に終わった。

その頃、十代の『テッキ』の中では……

クレイマン

「あの青い髪の少女、スバルだったか？中々の一撃だった。俺の防御を崩すとはな……」

クレイマンが腕を組みスバルの放つた一撃を評価していた。

ジ・アース

「私としては、私の攻撃を受けきったシグナムという騎士も中々……」

⋮

ジ・アースが腕組みをしてシグナムを評価する。

フォレストマン

「そう言えば、マスターの『テッキ』から見ていたが。この世界は女性が多いな……」

オーシャン

「というより、女性しかいないような……男性はエリオという少年だけだったような気がする……」

フレイム・ウイングマン

「それにしても、美しい女性が多かった……／／／」

フレイム・ウイングマンが頬を赤らめる。

オーシャン

「フレイム・ウイングマン！？」

フレイム・ウイングマンの様子をオーシャンが心配する。

フエザーマン

私はなんのはさんか好きだ！！！」

フユザーマンが顔を真っ赤にして叫ぶ。

バルマン

直接の面識は無いはずだ！」「さうかい！」と答へるは

フェザーマンのこきなりの発言にバブルマンはドン引きだった。

フエザーマン

「私が融合する前に、なのはさんが私を見ていたのだ！！あの憧れの眼差し……最高だー！」

## スパークマン

「いや、多分それはマスターを見ていたのだと思うが……」

スーパークマンが冷静に指摘する。

## バーストレディ

「それに召喚されたとしても、すぐにやられんな」と、アントが眼中に無いこと思つわよ?」

バーストレーディが冷たくシッ ハリを入れる。

スパークマン

「（それは、私達下級HERO全員に言える事なのでは？）

スパークマンが心の中でシッ ハリを入れる。

フェザーマン

「そ……そん……」

フェザーマンが膝を付きつな垂れる。

スパークマン

「ま……まあ、そう落ち込むな。フェザーマンは召喚される比率もかなり高い方だからな。その通り、なのはさんには気付いてもらえるぞ」

スパークマンが落ち込むフェザーマンを慰める。

フェザーマン

「そ、そしだな……まだここに来たばかりだしな……チャンスはあるよな？」

スパークマン

「ああ……むじゅ、なのはさんはかなり好みだ！共に頑張りうじゅやないか……」

フレイム・ウイングマン

「私もだ！ともに頑張ろつ……」

フレーム・ウイングマンも会話に参加する

ブエサーマン

「フレーム・ウイングマン、スパークマン……ああ！…ともに頑張るうつーー！」

涙を流したフューザーマンが、スパークマン、フレイム・ウイングマンと肩を組む。

「ああ、シグナム姉さん……！」の命にかけても、あなたをお守りします……！」

オーシャン

「ハラスエーハー!! 他の意見には心から賛同あるナウ!!」

アオレストマンとホーリシャンも叫ぶ。

# フォレストマン

オーシャン

——ああ！！

フォレストマンとオーシャンが握手をする。

ネオス

（ダメだ）……いつら……早く何とかしないと……）

ネオスが小さくため息をついた。

## 第4話 十代VSスバル！！（後書き）

ヒーロー達のキャラが……

でも、絶対こうこう思つてゐるよつた気がする……

## 第5話 ホテル・アグスタ（前書き）

連続投稿中です。

ペーズが崩れないといいんだけどな……

## 第5話 ホテル・アグスタ

スバルとの一戦から数日後、十代は釣り道具一式を借り、六課の宿舎の裏で釣りをしていた。

ハネクリボー  
「クリクリ」

十代

「訓練に出なくていいのかつて？」

ハネクリボー  
「クリ」

十代

「あいつらはあいつらで、やってるんだし、俺が無理に入る必要は無いさ。それに……」

ハネクリボー  
「クリクリ」

十代

「そうだな。こんな所で釣りなんてしてたら……」

リイン

「十代さん……やつと見つけましたよ……」

十代

「ゲツ……リイン……」

リインの姿を見た瞬間、十代の顔が引きつる。

リイン

「ゲッじやないですー！」んな所で釣り何かして……」

十代

「わかつたよ……ちゃんと勉強すればいいんだが？」

十代が釣り竿を引き上げる。

リイン

「違います。はやてひやんからの緊急召集です。十代さんも早く来てください。」

十代

「はやてから？珍しいな」

リイン

「はい、それと、ハネクリボーさんも来てくださいね？引つ込んでダメですかね？」

ハネクリボー

「クリー？」

スバルとの一戦の後、六課内にて姿を現したハネクリボーは、女性局員のハートを鷲掴みにしたのだった。

その後は、抱きつかれたり、撫でられたりとハネクリボーは散々な目に合わされたのだった。耐えられなくなつたハネクリボーは十代

のデッキの中に姿を消したのだが、その所為で十代はハネクリボーを出せと女性局員から大ブーイングを受けたのだった。

今では、そのかわいらしき容姿と、愛くるしい動作から、リインと並ぶ六課のマスコットとなつたとか……

ちなみに、管理局はリインは男性陣に、ハネクリボーは女性陣に大人気である。

十代

「何でハネクリボーも何だよ？」

リイン

「はやてちゃんがハネクリボーを胸に抱きたいからだそうです」

ハネクリボー

「クリ……」

ハネクリボーが十代に救いを求めるが、

十代

「悪い、相棒……俺にはどうする事も出来ない……」

十代はお手上げ状態だった。

それから移動した十代は、はやてと隊長陣、フォワード陣を召集し、ヘリに乗った。

ヴィータ

「遅えよ！何やつてたんだよーー！」

遅れてきた十代にヴィータが突つかかる。

リン

「また六課の宿舎裏で釣りをしてました……」

なのは

107

卷之三

一  
此へ歸れなしぬ  
一

ちなみに十代はこれまで5回ほど勉強やら訓練をサボつて釣りをしていました。その度にリインに見つかって説教を喰らうのだが。

十代

「それで？俺を呼んだのには訳があるんだろう？」

十代がはやてに問う。

はやて

「うん。今まで分からんかつたガジェットの開発者がやつとわかつてな。それにしても、ハネクリボー可愛いな～」

はやてがハネクリボーを抱きながら言つと、シャーリーはパネルを叩いて画像をだした。

フェイト

「ジエイル・スカリエッティ。生態関係の違法研究で指名手配されている科学者」

説明を受け継いだのはフェイト。十代達は配られた資料に目を通す。資料を読むと犯罪者ではなかつたらまさしく天才と呼ぶにふさわしい研究者だろ？。

十代

「うわ……性格悪そー」

スカリエッティの画像を見た十代の唐突な一言には達も苦笑いを浮かべる。

一応、十代は六課に保護されたとき、はやてから機動六課の方針を聞いていた。『ロストギア』と呼ばれる古代遺物の回収、特に『レリック』と呼ばれる赤い宝石の回収を専任している。恐らくスカリエッティと『レリック』には何か関連性があるとみて、六課はスカリエッティの行方を追うらしい。

なのは

「今回の任務はホテル・アグスタの警備です」

なのはが任務の説明をする。

なのは

「アグスタには骨董品オークションがあつて中には貴重なロストギアの護衛、及びオークションの参加者の安全の確保が目的だよ」

なのはが説明しているうちに、へりは田地に着いた。

ホテルの中の警備はなのは、フュイト、はやての3人、ホテル周辺にはシグナム、ヴィーダとフォワード陣が警備にあたる。

十代はその両方を兼ねており、ホテル内で待機し、外で何かあれば外に出るという事になっていた。

デュエルディスクは持ち込む事が出来ないため、シャマルに預けてある。

現在、なのはは十代と一緒に警備をしている。

時々念話でフェイト、はやて達に連絡を送っている。

ちなみにホテル内のため3人はドレスを着ていた。

ドレスに着替えた3人を十代が何のためらいも無く「奇麗だな」と言つたので、3人は顔を赤くしたのは内緒である。

なのは

「十代は地球で生まれたんでしょう？」

十代

「ああ。地球の、日本で生まれた」

なのは

「十代の世界にはカードゲームが流行してて、それをやる人を養成

する学校もあるんでしょう？

十代

「ああ、もう卒業しちまつたけどな……」

十代はなのはにデュエルアカデミアで自分が体験した事を話した。  
(コベルの事は話せなかつたが)

なのは

「そつか。十代も色々な事を経験して今の十代がいるんだ。そう言  
えば、ハネクリボーって結局何なの？カードの精霊って説明された  
けど、よくわからなくて……」

十代

「俺も詳しい事はわからないんだけど、ハネクリボーのカードは俺  
がデュエルアカデミアの入学試験を受ける時にある人から渡された  
んだ。それに俺は子供の頃からカードの精霊が見えた」

なのは

「つまり、謎の存在ってことなんだ」

十代

「そういう事だ」

数時間後、オーケーションは通常通り行われたが、突如ガジェットの  
襲撃があり、会場内は混乱していた。

十代

「俺は外の奴らを助けに行く」

なのは  
「わかった」

フェイト  
「無理しないでね」

なのはとフェイトと分かれた十代はシャマルが待機している所へと向かっていた。

十代

「シャマルさん！！」

シャマル

「十代君！ガジェットが……今、シグナムとヴィータちゃん、ザフィーラとスバルとティアナが応戦してるけど、数が多くすぎて……」

十代

「わかった。俺もあいつらのところへ行く」

シャマル

「お願  
い……」

シャマルが十代のデュエルディスクを十代に渡す。

十代は森を駆けていた。この場所に一番近いのは、スバルとティアナのいる場所だ。

ユベル

「十代」

走っている十代にユベルが呼びかける。

十代

「どうした？」

呼びかけられた十代は立ち止った。

ユベル

「ここの先に嫌な気配がする……」

十代

「え？」

十代はユベルの指差した方向を見る。

ユベル

「おそらくこの騒動の元凶がいるんだろう……」

十代

「じゃあ、その元凶をブッ潰しに行くか」

ユベル

「やれやれ、君ならいい加減立派だったよ」

十代達がじばりへ進むと、紫色の髪の少女が魔法陣を展開させて立っていた。

十代

「あいつはー?歳はエリオやキャロと同じ位か?」

少女

「……」

少女は十代を見るが、動くよくなそぶりは見せなかつた。

少女

「遊城……十代……」

突然、少女が十代の名を呼んだ。

十代

「何故、俺の名前をー!?」

少女

「あなたはドクターの探し物の一一つ……」

十代

「ドクター?誰だよ、そいつはー!?」

十代が聞き返すと、少女の前にモニターが現れた。

スカリエッティ

「(ひ)あげんよ(ひ)……遊城十代君」

十代

「なつー!お前は……!?」

ヘリの中で見た資料に載つていた男、ジェイル・スカリエッティ。

十代

「お前、まさか、ジェイル・スカリエッティ！？」

スカリエッティ

「ほう、私の名前を知っているとは、光榮だよ。機動六課からの入  
れ知恵かな？」

十代

「そんな事はどうでもいい。俺に何の用だ？まさか、俺をこの世界  
に連れてきたのはお前仕業か！！」

十代が声を荒げる。

スカリエッティ

「まあ、落ち着きたまえ。そんなくだらない事よりも、私は君の力  
に少々興味があつてね」

十代

「俺の力！？」

スカリエッティ

「そうさ。カードの力を使って戦い、精霊の姿が見え、そして、精  
霊ユベルをその身に宿している。実に面白い」

十代

「何故、ユベルの事を！？」

スカリエッティ

「君の事は最初から知っていたさ。全てね」

スカリエッティが不適な笑みを浮かべる。

十代

「こそこそしてないで、俺の前に来いよ。臆病者」

スカリエッティ

「安い挑発には乗らないよ。しかし、初対面がモニターというのは失礼だったかね？なら、私からの特別な贈り物を贈るとしよう」

スカリエッティがそう言つと、少女が魔法陣から何かを召喚した。

十代

「これは！？」

それは人の形をしたロボットだった。全身銀色で、顔のよつた部位には赤いモノアイが着いていた。

十代

「まさか、そいつの腕についているのは……」

スカリエッティ

「察しがいいね。そうさ、これは私が新たに作り上げた作品の一つ君と同じように『デュエルモンスターズで戦う人工生命体さ』

十代

「デュエルモンスターズで！？」

スカリエッティの説明を聞いた十代が驚く。

### スカリエッティ

「まだ試作段階だから対した戦力にはならないだろ？けど、君の相手にはちょうどいいだろ？ ゆっくりと遊んでくれてまえ」

スカリエッティはそう言い残して消えた。それと同時に紫色の髪の少女も姿を消した。

十代  
「くつ！」

十代がホテルに戻ろうとすると、スカリエッティの人工生命体が行く手を阻む。

人工生命体  
「十代、私とデュエルだ」

人工生命体が機械の音声で言つ。

十代

「くつ！ 足止めのつもりか！ なら、すぐに決着を付けてやる！」

十代と人工生命体がデュエルディスクを展開させる。

十代 & 人工生命体  
「「デュエル！！」」

十代 LP4000

人工生命体 LP4000

人工生命体

「ドロー。仮面竜を守備表示。さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド」

仮面竜 DEF1100

十代

「俺のターン、ドロー！！」

引いたカードは『融合』。手札は『E・HEROスパークマン』、『ヒーローシグナル』、『ヒーローバリア』、『融合回収』、『フレアスカラベ』、『コンバート・コンタクト』。

十代

「来い！E・HEROスパークマン！！」

E・HEROスパークマン ATK1600

十代

「行け！スパークマン！スパークフラッシュユー！」

スパークマンが右手の電撃を仮面竜に浴びせ、破壊する。

人工生命体

「仮面竜の効果を処理。アームドドラゴンLV3を召喚」

アームドドラゴンLV3 ATK1200

十代

「（アームドドラゴン？まさか……）カードを一枚伏せて、ターン

「ハンド」

人工生命体

「ドロー、アームドドリラゴン」→3の効果を処理。アームドドリラゴン→5を特殊召喚」

アームドドリラゴン→3が消え、アームドドリラゴン→5が召喚される。

人工生命体

「X・ヘッジキヤノン召喚。バトル! アームドドリラゴン→5で、スパークマンを攻撃」

X・ヘッジキヤノン ATK1800

アームドドリラゴン→5が両腕を振り回し、スパークマンを破壊する。

十代

「くつ……」

十代 LP4000 - 800 = 3200

十代

「トライ・アップ発動! 『ヒーローシグナル』→Jの効果によって俺はデッキから、『E・HEROフォレ斯特マン』守備表示で特殊召喚する! 』

E・HEROフォレ斯特マン DEF2000

## 人工生命体

「このターンのエンドフェイズ、アームドドラゴンLV5がモンスターを戦闘で破壊した事で、アームドドラゴンLV5は『アームードラゴンLV7』へとレベルアップする。」

アームドドラゴンLV5が光に包まれ、次の瞬間、アームドドラゴンLV7が姿を現す。

アームドドラゴンLV7 ATK2800

十代

「（アームドドラゴンに、X-ヘッドキャノン……やはり奴のテックは……）」

十代は気付いていた、この人工生命体の使用しているテックが十代のライバルの一人『万丈目 準』のものである事に……

## 第5話 ホテル・アグスタ（後書き）

久しぶりに普通の『テュエルシーン』が書けた……  
やつぱりこっちの方がやりやすいな。

## 第6話 決死の一撃！E・HERO マグマ・ネオス！！（前書き）

なのはとティアナの出来事が終わつたら、5D、Sの更新をしよう  
と思います！

## 第6話 決死の一撃！E・HERO マグマ・ネオス！！

十代 L P 3 2 0 0

人工生命体 L P 4 0 0 0

十代

「俺のターン、ドロー！魔法カード『融合』一手札のオーシャンと、場のフォレストマンを融合！来い！E・HERO ジ・アース！」

E・HERO ジ・アース A T K 2 5 0 0

十代

「バトル！行け、ジ・アース！X・ヘッジキャノンを攻撃！アースインパクト！！」

ジアースが両拳でX・ヘッジキャノンを粉碎する。

人工生命体 L P 4 0 0 0 0 - 7 0 0 = 3 3 0 0

十代  
「ターンエンド」

人工生命体

「ドロー、アームドドラゴン L V 7 でジ・アースに攻撃！」

アームドドラゴン L V 7 がジ・アースを破壊する。

十代

「ぐつ……」

十代 L.P 3200 - 300 = 2900

人工生命体  
「ターンエンド」

十代  
「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは『E・HERO ネオス』

十代

「魔法カード『コンバート・コンタクト』！自分の場にモンスターがない時、手札と『デッキから、『N』を1枚づつ墓地に送る。俺は手札から『・フレア・スカラベ』と、『デッキから、N・アクア・ドルフィン』を墓地に送る。」

十代はカードを墓地に送った後、デッキをシャッフルする。

十代

「その後、カードを一枚ドロー！！魔法カード『融合回収』を発動！墓地の『融合』と融合に使用したモンスターを手札に戻す。俺は『融合』と、オーシャンを手札に戻す。」

十代がデュエルディスクからカードを手札に加える。

十代

「魔法カード、『フェイクヒーロー』を発動！自分の手札から、『E・HERO』と名の付いたモンスター一体を特殊召喚する。来い

！『E・HERO ネオス！』「

E・HERO ネオス ATK2500

十代

「さらに、手札から魔法カード『コンタクト・ソウル』を発動！ネオスが場にいる時、手札、デッキ、墓地から『N』一体を特殊召喚する。俺は墓地からN・フレア・スカラベを特殊召喚する！！」

十代の場にカブトムシの様な姿のモンスターが召喚される。

N・フレア・スカラベ ATK500

十代

「そして、ネオスとフレア・スカラベを『コンタクト融合』！出でよ！『E・HEROフレア・ネオス！』」

ネオスとフレア・スカラベが場から消え、代わりにカブトムシを思わせる姿をしたネオスが召喚された。

E・HERO フレア・ネオス ATK2500

十代

「フレア・ネオスの攻撃力は、場の魔法、罠カード1枚に付き、400ポイントアップする！！」

E・HERO フレア・ネオス ATK2500 + 800 = 3300

十代

「行け！フレア・ネオス！！アームドドラゴン LV7に攻撃！！」

バーン・ツー・アッシュユー!!

フレア・ネオスが右手で火球を作り、アームドドラゴンに投げつける。

その攻撃を受けたアームドドラゴンは破壊された。

人工生命体 LP 3300 - 500 = 2800

十代

「俺はさらば、E・HERO オーシャンを攻撃表示で召喚して、ターンエンド。このターンのハンドフェイズに、フレア・ネオスはデッキに戻る」

フレア・ネオスは場から消え去った。

ネオスの「ンタクト融合体はネオスペース以外の場所では、長時間場にいる事が出来ないのだ。

人工生命体

「ドロー、トラップ発動、『レベル・バックアップ』！墓地から、アームド・ドラゴン LV7 を召喚条件を無視して特殊召喚」

アームド・ドラゴン LV7 ATK 2800

十代

「また、アームド・ドラゴンを……!?」

人工生命体

「ただし、このカードで召喚したモンスターの効果は無効となり、

攻撃力は0になる。そして、私はこのターン、モンスター効果の発動は出来ない

アームド・ドラゴン LV7 ATK2800 0

人工生命体

「このアームド・ドラゴン LV7を生け贋に、アームド・ドラゴン LV10を、特殊召喚！！」

アームド・ドラゴン LV7が消え、各部がさらに鋭くなったアームド・ドラゴン LV10が召喚される。

アームド・ドラゴン LV10

十代

「（危なかつたぜ、アームド・ドラゴン LV10は、手札1枚をコストに相手の場のモンスターを全滅させる効果を持つている。効果を使わっていたら、オーシャンは破壊され、ダイレクトアタックで俺は負けていた……アームド・ドラゴンの攻撃が来ても、伏せてある『ヒーローバリア』を使えば、オーシャンを場に残せる！）

人工生命体

「手札から速攻魔法『サイクロン』を発動。その伏せカードを破壊する」

十代

「何！？なら、そのサイクロンにヒーンして、リバーストラップ発動！『ヒーローバリア』！」

場に現れた竜巻が十代の『ヒーローバリア』を破壊するが、十代の

場のオーシャンは破壊されたヒーローバリアの力によつて守られた。

人工生命体

「アームド・ドラゴン LV10でオーシャンを攻撃！」

アームド・ドラゴン LV10がオーシャンを攻撃するが、アームド・ドラゴンの攻撃はオーシャンを破壊できなかつた。

人工生命体

「何が……？」

十代

「『ヒーローバリア』は、俺の場にE・HEROがいる時、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にできるのぞ」

人工生命体

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

十代

「（まずい、俺の手札は0、場にはオーシャンがいるが、アームド・ドラゴンには勝てない……次のドローで全てが決まる……）ドロー！ オーシャンの効果発動！ 俺のスタンバイフェイズに場か、墓地の『HERO』を手札に戻す！…」

人工生命体

「トラップ発動！『レベル・ドレイン』…このカードは、自分の場に『レバ』と名の付いたモンスターがいる時、エンドフェイズ時まで相手モンスター全ての効果を無効にする」

十代

「何！？なら、俺は、魔法カード『テイクオーバー5』を発動！『ツキの上からカードを5枚墓地に送る』

十代の墓地に送ったカードは『E・HEROネクロダークマン』、『ネクロ・ガードナー』、『Z・フレア・スカラベ』、『Z・グラント・モール』、『ダンティライオン』の五枚だった。

十代

「さらに、ダンティライオンが墓地に送られた事で、綿毛トーケン2体を守備表示で特殊召喚。ダンティライオンの効果は墓地にて発動する効果だ。よって、お前のトラップの影響は受けない！」

綿毛トーケン DEF0

十代

「ターンエンド」

人工生命体

「ドロー、アームド・ドラゴン LV10の効果により、手札の『Y・ドラゴンヘッド』を墓地に送る事で、相手の場のモンスターを全て破壊する」

アームド・ドラゴンの腹から大型のカッターが現れ、オーシャンと綿毛トーケンをハツ裂きにする。

人工生命体

「アームド・ドラゴン LV10でダイレクトアタック！！」

アームド・ドラゴンが十代に向けてドリルの付いた右腕を振り下ろす。

十代

「墓地のネクロ・ガードナーを除外する事で、相手モンスター一体の攻撃を無効にする！！」

十代の墓地からネクロ・ガードナーが現れ、アームド・ドラゴンの攻撃を防ぐ。

人工生命体  
「ターンエンド」

十代  
「俺のターン、ドロー！ テイクオーバー5の効果で、もう一枚ドロ  
ー！」

十代の手札は一枚だが、既にこの状況を開拓する方法は手札にあつた。

十代  
「墓地のネクロダークマンの効果により、ネオスを生け贅無しで召喚！」

E・HEROネオス ATK2500

十代

「そして魔法カード『ホープ・オブ・ファイフス』！ 墓地の『E・HERO』を五体選択してデッキに戻した後、カードを一枚ドローする！」

十代が墓地から『スパークマン』、『フォレストマン』、『オーシ

ヤン』、『ジ・アース』『ネクロダークマン』デッキに戻し、カードを一枚ドローする。

十代

「魔法カード『ミラクル・コンタクト』！場のネオスと、墓地のフレア・スカラベ、グラン・モールをデッキに戻して、E・HERO マグマ・ネオスを召喚！！」

十代の場からネオスが消え、マグマ・ネオスが召喚される。

E・HERO マグマ・ネオス ATK3000

十代

「マグマネオスの攻撃力は、場のカード1枚に付き400ポイントアップする！場には、合計三枚のカードがある！よつて攻撃力は1200ポイントアップ！！」

E・HERO マグマ・ネオス ATK3000+1200=4200

十代

「マグマ・ネオスでアームド・ドラゴンに攻撃！！スーパー・ヒート・メテオ！！」

マグマ・ネオスが巨大な隕石をアームド・ドラゴンに叩き付ける。

その隕石に押しつぶされ、アームド・ドラゴンは破壊された。

人工生命体 LP2800-1200=1600

人工生命体

「トラップ発動！』『レベル・ブラスト』！自分の場の『LV』モンスターが破壊された時、破壊されたモンスターのレベル×200ポイントのダメージを与える！』アームド・ドラゴン LV10のレベルは10。よって2000ポイントのダメージとなる』

十代 LP2900 - 2000 = 900

十代

「だが、俺の攻撃はまだ終わっていない！速攻魔法『コンタクト・アウト』！マグマ・ネオスの融合を解除し、素材モンスターを特殊召喚する！』

マグマ・ネオスが消え、ネオス、フレア・スカラベ、グラン・モルが召喚された。

人工生命体

「……！？」

十代の戦術で人工生命体の体が硬直する。

十代

「俺のモンスターにはまだ、攻撃が残っている！行け！ネオス！』

ネオスが人工生命体に攻撃する。

人工生命体 LP1600 - 2500 = 0

十代  
「勝った……ん！？」

十代

人工生命体は機能が停止したのか、その場で倒れ、爆発した。

十代  
「うわっ！？」

十代は爆風から身を守る。

十代  
「爆発した……ん？」

人工生命体が爆発した所にディスクのようなものが落ちていた。

十代  
「こいつは……つてやべえ！早くあいつ等と合流しねえと……」

十代はディスクを上着の内ポケットにしまい、スバル達と合流すべく走り出した。

スバル達と合流した十代は、残りのガジェットを全て殲滅し、ホタルに戻った。

十代  
「そういえば、ティアナなどといったんだ？」

ティアナの姿が見えないのに気付いた十代がスバルに聞く。

スバル

「あ……えつと……」

スバルが言葉を詰まらせる。

ヴィータ

「あいつ、さつきの戦闘ででかいミスをしちまつてな、それで、今は頭冷やすために、一人にさせとんだ」

スバルの代わりに、ヴィータが説明する。

十代

「ふうん」

軽い返事をした十代だったが、近いうちに良くないことが起きる様な感じがしていたのだった。

## 第6話 決死の一撃！E・HERO マグマ・ネオス！！（後書き）

結局、VWXYZ出せなかつた……

アームド・ドラゴンだけじゃ、内容が薄い様な気がする……

## 第7話 悲しい戦い（前書き）

今日はあの「伝説の回」です。

うまく書けてないかもしれません……

## 第7話 悲しい戦い

アグスタの事件から数日後。

ティアナの様子がおかしいとなの遼から相談があった。

まるで焦つてこようにしており、対応に困つてこらし。

十代はそんなティアナの様子を心配したフェイトとヴィータから相談を受けていた。

十代

「そういえば、最近、夜も自主練しての何度も見たな……」

フェイト

「やつぱり？ 頑張るのは、いい事なんだけど、ちょっとやつ過ぎたりっていうか……」

ヴィータ

「ああ。焦つてる様な感じがするんだよな……」

十代

「ティアナが訓練の密度をあげたのってホテルでの任務の後だろ？ ミスを取り返すために頑張つてんじゃねえのか？ あ～逃げられた……」

十代が竿を戻しながら言つ。

フェイト

「それは、そうだけ……それでも、やつすがりつて『泣かせるよ?』

フェイトがハネクリボーを胸に抱えながら囁く。

十代

「俺はあいつの事を知らないから何も言えねえけど、あいつって初めて会ったときも、何つづか……余裕が無いっていつか……」

十代が新しい餌を取り付けた竿を海に垂らす。

十代

「あいつ、強くなりたいって言つ以前に何かあんのか?俺はあいつが何かを追いかけてるよう見えるぜ?」

十代の言葉にフェイトとヴィータが表情を曇らせる。

フェイト

「実は……」

フェイト達はティアナと、ティアナの過去について話し始めた。

ヴァイス

「よお!十代!」

夜、外を歩いている十代に一人の男が声をかけた。

十代

「ん！？ヴァイスか」

十代とヴァイスは、十代が六課に保護され、六課の宿舎に向かう時のへりの中で知り合つたのだった。

何かと話が合つて、十代とヴァイスはすぐ「親しくなつたのだ。

ヴァイス

「散歩か？」

十代

「まあな」

ヴァイス

「そういうや十代。ティアナが夜、毎日自主練してゐるの知つてるか？」

ヴァイスが十代に聞く。

十代

「ああ。知つてゐる」

ヴァイス

「一応、忠告はしたんだけどな……いまいち効果は無かつた……」

ヴァイスが肩を落とす。

ヴァイス

「こ」のままだと、あいつ、いつかぶつ倒れるぜ？」

十代

「かもな。まあ、何かあつたら俺がフォローするさ」

ヴァイス

「そつか、頼むぜ」

そう言つて十代達は別れた。

ヴァイスは寝ると言つて宿舎にて、十代は……

十代

「よお」

ティアナが自主鍊をしている林にいた。

ティアナ

「え？ 十代さん？」

突然の訪問者にティアナが驚く。

十代

「こここの所、ぶつ続けて訓練してるだろ？ 体持たないぜ？」

ティアナ

「いえ、私みたいな凡人は人の何倍もやらなきや 行けませんから……」

…

ティアナがぶつきらぼうな返事をする。

十代

「兄の汚名を晴らすためか……」

ティアナ

「！？」

十代の眩きにティアナが大きく反応する。

ティアナ

「どうして、兄の事を！？」

十代

「フェイト達から聞いた」

ティアナは執務官を希望していた。だがその背景には兄の無念を晴らすという目的があったのだ。

唯一の肉親であつたティアナにとっては、兄の存在は強かつたのだろう。

しかし兄は任務中に殉死、周りから『無能』、『役立たず』の烙印が押された。

だからこそティアナは力を求めるのだろう。

亡き兄をバカにした人物達に対して証明したい。

ただそれだけなのだろう。

十代

「仮にお前が強くなつてもそれはお前の兄ちゃんが強いつてことだ

はならないんじゃないか?「

ティアナ

「どうこいつ意味ですか?」

十代

「お前が強くなつても、それはお前の強さだ。お前がこいつ強くなつても、周りはお前の事しか評価しねえよ」

ティアナ

「……」

十代の言葉にティアナが黙る。

十代

「それに、お前が手にしそうとしているのは偽物の強さだ。それじゃあ本当に強くなれねえよ」

十代はそれだけ言つと、宿舎に帰つていつた。

ティアナ

「何よ……偉そつこ……」

ティアナ

ティアナは兄の汚名を晴らすといつ事しか考えていなかつた。

「（あたしは強くならなくちゃいけないんだー・ランスターの弾丸は誰よりも強いてことを証明するんだー！）」

ティアナは拳を近くの木に叩き付けた。

ユベル

「君の言葉はあの小娘に届いたのかな？」

十代の自室にてユベルが十代に聞いた。

十代

「どうかな」

ユベル

「あの小娘は近いうちに何か、危ない事をする。気をつけとおくん  
だね」

ユベルはそう言い残し消えた。

十代

「（危ないか……確かにな……）」

十代はベッドに寝転がる。

十代

「そういや、三日後に『スターズ』と『ライトニング』が合同で模

「… 模擬戦やるつて言つてたな…」

十代はそつ然くと、眠りについた。

三日後

フェイント

「あつ、もう模擬戦始まつちやつてる?」

エリオ

「フェイントさん!?」

なのはとスターズ分隊の模擬戦を見るために戦闘圏外のビルの屋上にフェイントが駆け込んできた。

フェイント

「私も手伝おうと思つてたんだけど…・・・」

ヴィータ

「今はスターズの番。」

フェイント

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けよつと思つたんだけどね。」

「

ヴィータ

「ああ、なのはむじゅうとじゅう訓練密度濃いからな。少し休ませねえと。」

フロイト

「なのは、部屋に戻つてからもずっとモニターに向かいつぱなしながら。訓練メニュー作つたり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり。」

エリオ

「なのはせさん・・・訓練中もいつも僕達の」と見ててくれるんですよね。」

キャロ

「本当に・・・ずっと。」

フロイトとヴィータの会話にエリオとキャロも「ずっと自分達の」と見ていてくれて、「と話す。

フロイト

「やうこえば、十代は?」

ヴィータ

「さあ? また釣りでもしてんじやねえの?」

フロイト

「もづ、模擬戦見に行くつて言つてたの?……」

そうしてこの間に、模擬戦が始まった。

十代

「始まつたか……」

十代はなのは達やフェイト達からは見えないビルの屋上から模擬戦の様子を見ていた。

ティアナを見ると、彼女の戦闘にはいつもキレの良さが無かつた。しばりくするとあたりに煙が舞う。

なのは

「…レイジングハート。モードリリース。」

レイジングハート

『A11 Liangt』

十代

「ユベル、今からあいつ等を止めに行つてくる。それで、お前に頼みがある」

ユベル

「何だい？」

十代

「俺が止めに入ったら、フロイト達が止めに入るだろ？から、その足止めをして欲しい」

コベル

「やれやれ、そう来るとは思ってたけど……わかったよ」

コベルはさう言つと、姿を消した。

なのは

「一人とも、どうひきやつたのかな……？」

なのはが小さく、そして冷たく告げる

「頑張つてるのはわかるけど……模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……？」

よくみるとスバルの拳を右手で、空中に浮いてるティアナを左手で支えている。

するとティアナは距離をとり、スバルの『ウイングロード』に着地する。

ティアナ

「私はつ……もつ……誰も傷つけたくないから……」

『ファントムブレイザー』をなのはに放つが、なのはの放った『クロスファイアーシュート』に相殺された。

射する。 なのははスバルをバインドで捕縛すると、ティアナに砲撃魔法を発

「少し、頭冷やそつか……」

なのははそつ言い、砲撃をティアナに向けて発射した。

スバル

スバルの声が訓練場に響く。

しかし、砲撃の直撃を受け、撃墜されたはずのティアナは爆風の中から現れなかつた。

「 なのは  
? 」

「え？」  
スバル

爆風の中から現れたのはティアナを抱えた十代だった。

「よつとー」

十代がウイングロードの上に着地する。

なのは

「十代？なんのつもりかな？邪魔しないで欲しいんだけど……」

なのはが冷たく言い放つ。

十代

「そう言つ訳にも行かなくてな……」

十代が抱えていたティアナをスバルに預ける。

スバル

「あ、あの……十代さん？」

ティアナを受け取ったスバルがいつもとは様子が違う十代に声をかける。

十代

「お前は引っ込んでる。足手まといだ……」

十代が冷たく突き放す。

スバル

「で……でも……！」

スバルが食い下がろうとするが、

十代  
「行け」

十代のいつもとは全く違う氷の様な眼差しを向けられ、スバルはフ  
エイト達のいる所へと戻つていった。

ウイングロードから近くのビルへと降り立つた十代はデュエルディ  
スクを展開させ、なのはに向き直る。

なのは

「私とやるつもり?」

十代

「そう見えないか?」

なのは

「十代でも、邪魔するなら容赦しないよ?」

なのはがレイジングハートを構える。

十代

「望む所だ!-!」

今、『霸王』と『管理局のエース』の戦いが始まつとしていた……

## 第7話 悲しい戦い（後書き）

難しかつた……

次回は、十代VSなのはです！

## 第8話 激突！十代▽Sなのは…（前書き）

十代▽Sなのはです。

今回は長くなると思うので、分ける事にします。

色々おかしいかもしませんが……

## 第8話 激突！十代VSなのはーー！

スバルがティアナを抱えて戻ってきたのと同時にヴィータが十代を見て怒鳴っていた。

ヴィータ

「あの野郎！何考えてんだよーー！」

フェイト

「やつぱり、止めた方がいいよね？」

フェイトが一人を見て言つ。

ヴィータ

「ああ、エリオとキャロ、スバルはここで待機、あたしとフェイトは……」

ヴィータが突然言葉を途切らせる。

フェイト

「ヴィータ？……ツー？」

スバル＆エリオ＆キャロ

「「「えつー？」」」

フォワードの3人も驚く。

フェイト達の周りには植物のツタの様なものが現れフェイト達を囲んでいた。

ヴィータ

「何だよ、これ……」

ヴィータがそう言つと同時にフュイト達の前にユベルが姿を現す。

ユベル

「君達にはここでもとなしくしてもらひ

ヴィータ

「誰だ、てめえはーー！」

ヴィータが怒鳴る。

ユベル

「僕はユベル。十代の中には『テュエルモンスター』の精靈と言え  
ば、君達にもわかるかな？」

フェイト

「十代のーー？」

ユベル

「そう、僕は十代に頼まれて君達を止めしているのさ

ヴィータ

「ふざけんなーー！」

ヴィータがグラーファイゼンを開闢させ、ユベルを攻撃するが、

ヴィータ

「うわッ！？」

ユベルに攻撃したヴィータは跳ね返され、地面に叩き付けられた。

フュイト

「ヴィータ！－！」

フュイトがヴィータを助け起こす。

ヴィータ

「お前……一体何を……

ユベル

「僕への痛みは君のものなんだよ。僕を傷付ければ、君も僕と同じだけ傷つくなぞ。」

フュイト

「何を言つて……

ユベル

「さてと、おしゃべりはあまり好きじゃないんだ。どうしても邪魔をするもんぢやない！」

キヤロ

「あやつーーー！」

キヤロがツタに縛られ、ユベルの腕に誘われた。

ユベル

「もし君達が十代達の邪魔をすると言つのなら、この小娘をここで始

末するよ？」

フュイト

「キヤロー！」

フェイトがバルディツシュを展開させ、構える。

「それとも、この小娘をその小僧達と戦わせて同士討ちさせるのも、面白いんじゃないかな？」

ユベルが狡猾な笑みを浮かべる。

大正十年

フェイトが悲痛な叫びをあげる。

ユ  
ベ  
ル

「だったら、おとなしくしているんだ。  
をしたらこの小娘を殺す」

ユベルがそう詰うとフロイトとヴァイータはデバイスをしました。

それを見ていたスバル達も何も言わなかつた。

ユ  
ベ  
ル

「一つ聞いておくけど、君達は十代が何も考えずにあの女と戦つていいと思つていぬのかい？」

フェイト

「え！？」

ユベル

「それを知りたければ、黙つて見ているんだね」

ユベルはさう言つと十代達の方を向いた。

それと同時にフェイト達も十代達の方を見た。

十代

「ドローー！『融合』発動！！」

十代が融合のカードを『ライスク』にセットする。

十代

「手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！…来い！  
マイフェイバリットカード、E・HEROフレイム・ウイングマン  
！」

十代の場にフレイム・ウイングマンが現れる。

十代

「行け！フレイム・ウイングマン！なのはに攻撃だ！フレイムショ  
ート！」

フレイム・ウイングマンが右手の竜の口から炎をなほにに向けて発射する。

### レイジングハート 『プロテクション』

レイジングハートがオートガードで防ぐが、フレイム・ウイングマンの攻撃は並大抵の防御力では防げない。

それはシグナムとの戦いやスバルとの戦いで証明されている。

なのは  
「くつ！？」

フレイム・ウイングマンの攻撃にシールドが耐えきれず、なのはが吹き飛ばされるが、なのはは吹き飛ばされる寸前にディバインショーターを開いて、フレイム・ウイングマンに向けて発射した。

十代

「くつ！速攻魔法『融合解除』！！」

ディバインショーターがフレイム・ウイングマンに直撃する前にフレイム・ウイングマンの融合が解除され、ディバインショーターをかわす。それと同時にフェザーマンとバーストレディが現れる。しかし、誘導弾でもあるディバインショーターは融合を解除したフェザーマンとバーストレディに向かう。

十代

「くつ！迎撃しろ！フェザーマン、バーストレディ！！」

なのはの展開させた『ディバインシューター』の数は5つ。

フェザーマンは両翼から羽を飛ばし、5つの内、3つを消し、バストレーディも両手に一つずつ持った火球を残つた『ディバインシューター』に投げつけ相殺させた。

十代

「フェザーマン、バーストレーディ！そのまま攻撃だ！！」

フェザーマンとバーストレーディがなのはに攻撃を仕掛けるが、どちらも基本攻撃力が低いため、レイジングハートのオートガードによつて弾かれる。

なのは

「そんな弱い攻撃じゃ、私にダメージは『えられないよ？』

十代

「わかつてゐるさ…俺はカードを一枚伏せる……はツ…！」

十代が気付いた時にはなのははカートリッジをロードして、『ディバインバスター』の発射体勢を取つていた。

なのは

「ディバインバスター！！」

なのはの発射した『ディバインバスター』が十代達に向かつて行く。

十代

「トラップ発動！『ヒーローバリア』！！俺の場にE・HEROがいる時、相手からの攻撃を一度だけ無効にする！！」

フェザーマン達の前に現れた透明の壁がディバインバスターを防ぐ。

なのは

「……」

なのはは内心驚いていた。自分が必殺と思って撃つた一撃が簡単に防がれたのだ。

十代

「ドロー！ 来い！ スパークマン！ ！」

十代の場にスパークマンが現れる。

十代

「さりに、魔法カード『エレメンタル・ギフト』！ 自分の場のE・HERO1種類につき1枚カードをドローする。俺の場のヒーローは3体。よつて3枚ドロー！」

十代がカードを3枚ドローする。

十代

「カードを1枚伏せ、装備魔法『スパークガン』をスパークマンに装備！」

スパークマンがスパークガンを装備したのはに向ける。

十代

「スパークガン発射！ ！」

スパークマンがスパークガンを3発発射するが、なのははそれを全てかわした。

十代

「（スバルには通用した『スパークガン』も、なのはには効かないか……）『スパークガン』の弾丸は3発、弾丸が尽きたとき、『スパークガン』は破壊される」

スパークガンがバリーンという音をたてて破壊される。

十代

「だつたら攻撃だ！フェザーマン、バーストレディ、スパークマンで、攻撃……」

十代が攻撃の指示を出そつとすると、フェザーマン達は桃色のロープの様なもので縛り付けられていた。

十代

「バインドか……」

十代はリインに教えてもらつた事を思い出していた。

敵を捕縛する魔法があると。

なのは

「ディバインバスター！！」

なのはが再び、ディバインバスターを動けないフェザーマン達に発射する。

その攻撃をフュザーマン達は避ける事が出来ず全てのヒーローが破壊された。

十代

「ぐああッ！…」

十代 LP80000 - 10000 - 12000 - 16000 = 4200

十代のライフが半分近くまで削られる。

十代

「トリップ発動！」『ヒレメンタル・ミラージュ』…自分のE・HEROが破壊されたとき、破壊されたE・HEROを全て復活させる。蘇れ！俺のヒーロー達！…！」

十代の場にフェザーマン達が復活する。

十代

「（何とかヒーロー達を場に残せたが、このままじゃヤバい……）

ユベル

「（十代）

突然、十代の頭にユベルの声が響く。十代とユベルは今は別々の所にいるが、魂の融合を果たしているため短時間の会話が可能なのだ。

ユベル

「（今じゃ、霸王の力を使うんだ）」

十代

「（霸王の一…?）」

ユベル

「（もはやあの女に君の声は届かない。なら、圧倒的な力を見せつけて屈服させるしかない。その力が君のテッキには眠っている）」

十代

「（ユベル……だが、それは……）」

ユベル

「（確かに君はその力で君の仲間達を傷付けた。だが……君は霸王といつ悪に染まつてでも、あの女を……）」

十代

「（わかつた……）」

ユベル

「（あの女を助けてやるんだ。あの女も君が助けた小娘も……信じているよ、十代……）」

ユベルとの会話はここで途切れた。

それと同時に、十代は覚悟を決めていた。

十代

「（のは

「（のは

「（…?）」

十代の突然の呼びかけになのはが動きを止める。

十代

「今の俺では、お前の心に声を届ける事ができない……なら、俺は悪に身を墮としてでも、お前をお前自身の闇から引寄せ出す……」

なのは

「な、何を……」

れつまでの十代とは違ひになのはは狼狽していた。

それはなのはだけでは無かつた。

十代達の戦いをモニターで見ていたフュイト達も十代の様子を見て驚いていた。

フュイト

「十代の様子が……変わった！？」

エリオ

「僕、あんな十代さん初めて見ます……」

キヤロ

「こつもの十代さんじゃ……ない！？」

そして、なのはもフュイト達も十代の瞳の色が金色に変わっているのに気が付いた。それと同時にその瞳に恐怖の念を抱いていた。

十代

「ドロー。なのは、お前を闇から引きすり出すために俺は霸王になる。そして、俺が悪に染まるのなら、俺のヒーロー達も闇に染まる！行ぐぞ！魔法カード『ダーク・フュージョン』を発動！！」

第8話 激突！十代VSなのはーー（後書き）

次回、イービルヒーローが登場しますーー！

お楽しみにーー！

第9話 決着！超融合発動！！（前書き）

なのは戦、決着です！！

## 第9話 決着！超融合発動！！

十代

「『ダーク・フュージョン』の効果により、場のフェザーマンとバーストレディをダーク・フュージョン！！」

フェザーマンとバーストレディが場に現れた黒い渦に吸収され、消える。

十代

「出でよー。』E・HERO インフェルノ・ウイング』！..」

十代の場にインフェルノ・ウイングが召喚される。

しかし、フレイム・ウイングマンとは違い、女性の体をしたヒーローだった。

また、今まで十代が使っていたヒーローとは違い、ダークで邪悪なイメージがあった。

フェイト

「インフェルノ・ウイング！？フレイム・ウイングマンじゃない！？」

ヴィータ

「あのダーク・フュージョンって奴で召喚された召喚獣、嫌な感じがするな……」

エリオ

「あっ、それ僕も感じました！」

フェイト達の会話にエリオも加わる。

キヤロ

「何か、今まで十代さんが使っていた召喚獣とは違つて邪悪な感じがします……」

未だにユベルに縛られたままのキヤロが言つ。

ユベル

「あのモンスターは『E・HERO』。十代の『E・HERO』同士が融合する事で邪悪なヒーローが誕生する。だが、その力は強力だが、その邪悪な力を支配できるほどどの力が無ければ使いこなすのは難しい……」

ヴィータ

「つて事は……」

フェイト

「十代はその邪悪な力を使つてでも、なのはに挑むつてことー？」

ユベル

「さあね……」

ユベルはそれきり口を開かなかつた。それは、フェイト達にこの戦

いを黙つて見ていろといつ意思表示だった。

十代

「インフェルノ・ウイングで攻撃」

インフェルノウイングが飛び上がり、両手で青白い火球を作り、な  
のはに投げつけようとする。

なのは

「……ッ！？」

なのはがインフェルノ・ウイングをバインドで捕縛しようとするが

……

なのは

「え！？」

バインドはインフェルノ・ウイングを捕縛する事は無く消えた。

十代

「『ダーク・フュージョン』で召喚されたモンスターは、このター  
ン魔法、罠、モンスターの効果の対象にはならない」

十代が静かに告げる。

十代

「つまり、俺が次にカードをドローする時が来るまで、インフェルノ・ウイングにバインドなどの捕縛魔法は無力となる」

バインドを無力化したインフェルノ・ウイングは青白い火球をなのはに投げつけた。

十代

「『インフェルノ・ブラスト』！！」

なのは

「くつ！？」

なのはがレイジングハートのオートガードを使い、インフェルノ・ウイングの攻撃を防御するが……

なのは

「なに？」

オートガードを突き破った微量の炎がなのはのバリアジャケットを少しだけ燃やした。

なのは

「くつ！ それでも！！」

すぐに十代から距離を取ったなのは、ディバインバスターの発射体勢を取った。

なのは

「ディバインバスター！！」

レイジングハートの先端から極太の魔力砲が発射される。

インフェルノウイングが両腕と背中の両翼で防御するが、ディバインバスターの威力に負けて爆散する。

十代

「ぐつー!?

十代 LP4200 - 2100 = 2100

なのは

「まだやるつもり? それとも、負けを認める? どちらにしても、私は十代を叩きのめすけど」

十代

「.....」

十代が無言でカードをドローする。

なのは

「そう.....あくまで私とやるつもりなんだね?」

なのはがレンジングハートを構える。

十代

「場のスパークマンを生け贋に捧げ、E - HERO マリシャス・エッジ召喚! ! マリシャス・エッジは、レベル7だが、相手の場にモンスターがいる時、生け贋を一体減らす事が出来る」

スパークマンが消え、藍色のボンデージ服に身を包んだヒーローが

現れる、先程のインフェルノ・ウイングと同じようにダークで邪悪な印象がある。

十代

「マリシャス・エッジの攻撃。『ニードルバースト』！！」

マリシャス・エッジが両手に装備された針をなのなにに向けて発射する。

なのは

「そんな攻撃じゃ、私には届かないよ……！」

なのはが右手で防御壁を展開させ、マリシャス・エッジの攻撃を防ぐが……

なのは

「痛ッ！？」

先程のインフェルノ・ウイングと同じようにマリシャス・エッジの針がなのはの防御を貫通して、なのはの左腕を抉つた。

十代

「マリシャス・エッジは、守備を貫通して、ダメージを『ひき』

なのは

「さつきの召喚獣も……」

十代

「ああ。インフェルノ・ウイングも、守備を貫通する効果がある。カードを2枚伏せる

なのはは距離を取つたまま、攻撃に移つた。距離を取つて戦えば、霸王十代の攻撃も届かないと考えたのだ。

なのはは、カートリッジをロードし、再びティバインバスターの発射体勢を取る。

十代

「ドロー・マリシャス・エッジに装備魔法『ヴィシヤス・クローザー』を装備!」

マリシャス・エッジの右手に装備された針が黒いオーラを纏う。

十代

「マリシャス・エッジで攻撃!」

マリシャス・エッジがなのはに攻撃すべく上空に飛び上がるが、その直後に、マリシャス・エッジはなのはのバインドをまともに受けてしまった。

十代

「何……」

なのは

「今度こそ、十代、頭冷やそう……」

なのはが冷たく囁つと同時にティバインバスターを発射する。

発射されたティバインバスターは身動きの取れないマリシャス・エッジに直撃する。

訓練場の上空に桃色の爆風が起きる。

ヴィータ

「終わったか……」

ヴィータが呟く。

フュイト

「十代……」

エリオ

「そんな……」

キヤロ

「十代さん……」

フュイト達が口々にそつ呟くが、ユベルだけは彼女達とは違う事を  
言った。

ユベル

「まだだ。よく見り……」

ユベルがモニターを指差す。

一同

「「「「えーー?」」」

なのは

「どうして?」

なのはが口を開く。

なのは

「どうして、十代はまだ立ってるのかな?……」

十代

「『ヴィシヤス・クロー』は装備モンスターが破壊される時、このカードを手札に戻す事で装備モンスターを破壊から守る事が出来る」

自分の攻撃を何度も受けても倒れない十代を見て、なのはの心は折れそうになる。

しかし、ここまで来た以上、十代を倒すしか無いのだ。自分の過去と同じ様な事をもう誰にも体験させないために。

なのは

「(ディバインバスターが効かない……私の残り魔力はかなり少ないけど……私の今持てる全ての魔力を注いだディバインバスターで……)」

十代

「『ヴィシヤス・クロー』の効果で相手の場に、イービルトークンを特殊召喚する」

なのは  
「え！？」

なのはの田の前にイービルトークンが現れる。

なのは  
「どうこうもりー？こんな事しても私には……」

十代  
「次の一撃で終わらせる」

なのは  
「……！？」

それを聞いたなのは覚悟を決め、レイジングハートを構えた。

なのは

「行くよ……十代！？」

なのはがディバインバスターの発射体勢に入り、自分の今持てる魔力全てを注ぎ込む。

十代

「その攻撃は通用しない！速攻魔法『超融合』！？」

十代となのはの上空に巨大な雷雲が現れる。

十代

「手札一枚を捨てる事で、場のモンスター2体を融合させる！！』  
『ヴィシヤス・クロ一』を墓地に送り、マリシャス・エッジといービ  
ルトーケンを融合！－！」

マリシャス・エッジとイービルトーケンが雷雲に吸い込まれる。

「現れるー!『E - HERO』マリシャス・デビル』――」

十代の場にマリシャスエッジよりも凶悪な姿になつた最凶のE-HEROマリシャス・デビルが姿を現わす。

なのは

十代

なのはがデイバインバスターを発射する直前にマリシャス・デビルが両腕に装備された巨大な針を発射する。

「バクワ

レイジングハートの先端から巨大な魔力砲が発射され、マリシャス・デビルの発射した針と激突する。

訓練場に巨大な爆発が起つた。

なのは

その爆発に巻き込まれなのはが吹つ飛ぶ。

十代

十代もその爆発に巻き込まれまいと必死に堪えていた。

## マリシャス・デビル

卷之三

爆風の中でマリシャス・デビルが十代に語りかける。

十代

「（マリシャス・デビル！？）」

マリシャス・デビル

（俺様を生け贋にしてネオスを呼べ！）

十代

「何を！？」

# マリシャス・デビル

「（俺様に同じ事を2度言わせるな！お前の場に伏せられた最後の皆を使えと言つてゐる――）」

十代

「（最後の砦！？そつか！）」

十代は自分の場に伏せられた最後の伏せカードを見る。

『マリシャス・デビル

「（お前がそれを使うまでに、俺様が吹き飛ばされたあの女を連れ戻す！）」

マリシャス・デビルが吹き飛ばされたのはを抱きかかえるようにして助ける。

なのは

「……！？」

意識が朦朧としているのか、なのはは何がどうなっているのか理解できていなかった。

『マリシャス・デビル

「（十代！）」

マリシャス・デビルが十代に呼びかける。

十代

「（ああ！）トラップ発動！『ヒーロー・フォーメーション・チエンジ・』！俺の場の『HERO』と名の付いたモンスターを生け贋に、デッキから生け贋にしたモンスターよりもレベルの低いヒーローを特殊召喚する！マリシャス・デビルを生け贋に、現れろ！『E・HEROネオス！』」

マリシャス・デビルが消え、十代の場にネオスが召喚される。

十代

「ここは…？」

なのは

「どこなの？」

意識を取り戻したなのはが周りを見る。

そこには、十代となのは以外の人は存在せず、周りは真っ白だった。

ネオス

「どうやら、十代となのはの魂が交差する場所なのだろうな」

と、ネオスが言つ。

十代

「魂？」

なのは

「じゃあ、ここにいるのは私と十代だけってこと?？」

ネオス

「そういうことになる。だが、十代となのは、君達は互いに話さなければならぬ事があるんじゃないのか?」ここにいられる時間はそう長くない。話すべき事だけを話すんだ」

ネオスはやつらつと消えてしまった。

なのは

「十代はどうして、私達の訓練に割り込んで来たの？」

なのはが一番気になっていた事を聞く。

十代

「俺は、お前がどうしてティアナにあんな事をしたのかが知りたかった。ただ、力の差を見せつけるだけなら、やりかたはいくらでもある」

なのは

「……」

十代

「それで思つたんだ。お前は、なのはは心の中に過去の悲しみや辛さを抱え込んでるんじゃないかつて……そして、過去の辛い事と同じ道をティアナが辿りつとしているから、それで力づくで止めたんじゃないかつて……」

なのはにとつて、十代の言つている事は凶星だった。

十代

「でも確信が持てなかつたから俺はお前に戦いを挑んだ。デュエル

を通してお前の心を感じよつと想つたんだ

なのは

「だから……」

十代

「まあ、こんな事になつちまつたけどな……」

十代が笑う。

なのは

「戻つたら、十代の事、私達に教えてくれる?」

十代

「ああ、でもその代わり、お前の過去に何があつたのか、教えてもらひばり?」

なのは

「うん。約束だよ?」

そして爆風が消えた訓練場のビルの屋上には、氣を失つたなのはをお姫様だつこした十代が立つていた。

## 第9話 決着！超融合発動！！（後書き）

（補足）

この話の最後に、十代となのはが会話していたのを映像にすると、十代と明日香のペアデュエルで、VS剣山＆レイ戦の時に十代と明日香が会話をして、十代が3年間を振り返っているときの様な感じです。

第10話 和解と過去（前書き）

過去編は長くなると思うので分けます。

## 第10話 和解と過去

なのはを医務室に運んだ十代は宿舎の屋上にいた。

十代

「そろそろ、話すべきかな……」

十代が小さく呟く。

十代はホテル・アグスタの事件から数日後、スカリエッティが送り込んで来た人工生命体が最後に残していくディスクをはやてと共に見た。

十代

「つつても、内容からして話しにくいよなあ……」

十代が頭を抱える。

ユベル

「話せばいいじゃないか」

突然表に出て来たユベルが言う。

十代

「他人事のように言つてるけど、お前の事もだからな？」

ユベル

「それがどうしたつて言つんだい？今更一人や一人に知られたとしても、僕は構わないけどね」

十代

「お前なら、やつらがいつ思つたけどな……」

ユベル

「それに、あの女には自分の過去を話すと言つたんだひつへ。」

十代

「……」

十代達が話していくと突然アラートが鳴り響いた。

十代はヘリポートでなのは達と合流した。

何やら揉めていたようすで、場は重い空氣に支配されていた。

誰もがこの空氣を何とかしたいと思つてゐる中、突然、ユベルが表に出た。

ユベル

「まったく、どうもこいつも不器用すぎて見てられないね……」

突然現れたユベルを見た一同は驚いた。

ヴィータ

「てめえはー?」

ユベルは殺氣立つてゐるヴィータを無視してモニターの方を向いた。

ユベル

「君達に関わりあつつもりは無いけど、まずはあの田障りな『ハリ』を掃除するのが先なんじゃないかな?」

ユベルがモニターに映つてゐる新型ガジェットを指差す。

十代

「ああ。まずは、あいつ等を片付けないとな……」

十代がヘリに乗り込もうとするが、

十代

「ぐつー!?.」

表情を歪め、うずくまつてしまつ。

フェイト

「十代!?.」

うずくまつた十代を見たフェイトが十代に駆け寄つた。

ユベル

「管理局のHースとの戦いは相当キツかつたみたいだね。少しほんぢだい?」

ユベルが腕組みをして十代を見下ろす。

十代

「だけど……」

フュイト

「いいから十代は休んで、ガジヒットの方は私達が何とかするか  
……」

起き上がりうとある十代をフュイトが止める。

ヴィータ

「まあ、あれぐらいなら何とかなるだろ」

なのは

「じゃあ、フォワードのみんなは、待機、ガジヒットは……」

ユベル

「待った」

なのはの指示をユベルが遮った。

なのは

「え！？」

ユベル

「ここは僕が行くよ。あれぐらいのものはさすがに付けられ  
る」

十代

「ユベル……」

うずくまっていた十代が顔を上げ、ユベルを見る。

ユベル

「ここからあそこまで飛んでいけば、十分くらいで着くだろうね。  
僕の戦いをしつかりと田に焼き付けるといこう」

ユベルはさう言つと背中の翼を広げた。

はやて

「何やて！？十代の精霊が単独でガジェットを！？」

部隊長室でなのはとフェイトの報告を聞いたはやてが驚いた。

なのは

「何か……止める間もなくつていうか……」

フェイト

「十代は任せておけば大丈夫だつて言つし……」

フェイトが部隊長室のソファーに座つている十代を見る。

十代

「ユベルは強い。あいつに任せとおけばすぐ」に終わる

十代の言葉を聞いたはやはてはユベルとガジェットの姿が映し出されたモニターを見る。

ロビーでもフォワードのメンバーとヴィータ、シグナム、シャーリーがモニターを見ていた。

ユベル

「随分と多いけど……」

ユベルの左腕がデュエルティスクのよつた形になる。

ユベル

「すぐに片付ける」

ユベル LP 8000

ユベル

「ドロー、魔法カード『ゼロ・サモン』発動！この効果により、ライフを1000払い、手札から攻撃力0のモンスター1体を特殊召喚する。僕は手札から僕自身『ユベル』を召喚！！」

ユベルの体からもう1一体のユベルが分離して場に現れる。

フュイト

「ユベルがもう1体！？」

戦闘の様子を見ていた十代以外全員が驚く。

ユベル

「さらに僕は『スナイプ・ストーカー』を通常召喚……！」

ユベルの場にルーレットの付いた銃を持った黒い悪魔が現れる。

ユベル

「スナイプストーカーの効果発動。手札を1枚捨て、場のカードを1枚選択する。サイコロを一回振り、1か6以外の目が出た時、選択したカードを破壊する。僕は『ユベル』を選択する……！」

はやて

「自分の召喚獣を破壊つて……そんな……！？」

十代

「いや、これでいい……」

十代が静かに言う。

なのは

「これでいいって……自分の召喚獣を破壊するのには何か理由があるってこと？」

なのはが十代に聞く。

十代は小さく頷いた。

ユベル

「僕は手札の『サクリフアイス・ロータス』を捨て、スナイプ・ストーカーの効果を発動！！」

場にサイコロが現れ、数回転がる。

ユベル

「出た目は3だ。よつてユベルは破壊される」

スナイプストーカーが場にいるユベルに銃を向けて発射する。

そしてユベルが破壊され、爆発する。

ヴィータ

「あいつは何やってんだよ！？ふざけんのか！？」

ロビーでユベルの戦闘を見ていたヴィータが声を荒げた。

シグナム

「だが、自らから召喚獣を破壊するのには、何か訳があるのかもしれん」

シグナムが自分の考えを言つ。

ヴィータ

「何だよ、訳つて……」

シグナム

「さあな」

シグナムはそう言つて再びモニターに目を向けた。

ユベル

「場の『ユベル』が破壊された時、手札、デッキ、墓地から『ユベル - Das Abschrecklich Ritter』一体を特殊召喚する!!」

ユベルが破壊された際の爆発が収まるごとに、そこには禍々しい黒い双頭の竜が姿を現した。

はやて

「この召喚獣は!?」

十代

「『ユベル - Das Abschrecklich Ritter』。

簡単に言えば、ユベルの第一形態だ」

なのは

「第一形態?」

なのはが聞く。

十代

「ユベルは戦闘では破壊されず、自分の受けた攻撃をそのまま相手に返すという効果を持っている」

フェイト

「昼の模擬戦の時、ヴィータがユベルに攻撃したら、そのまま弾き返されたけど……」

十代

「それがユベルの持つ力だ。だけど、ユベルには更なる姿がある」

はやて

「その姿が……」

はやてがモニターのユベルを見る。

ユベル - Das Abschleichen Ritter (以下、ユベル第一形態) を確認したガジェットはユベル第一形態に攻撃を開始するが、その攻撃はユベル第一形態には届かず、攻撃したガジェットは自らの攻撃を受け、破壊された。

ユベル

「僕を戦闘で破壊する事は出来ない。だって攻撃は僕への愛。僕を傷付ければ、僕を傷付けた分だけ君達も傷付くんだ」

残りのガジェットはユベルには攻撃せずに、上空で停止した。

ユベル

「攻撃しなければ、傷付かないと思っているのか。さすがはあのヤブ博士の作った兵器だ。せこい所が制作者そつくりだ」

ユベルが口元を歪める。

ユベル

「でも、ここのタイミングで、ユベル - Das Abschneulich Ritterの効果が発動。僕以外のモンスターを全て破壊する」

ユベルの場のスナイプストーカー、残りのガジェットが全て爆発し、粉々になる。

はやて

「圧倒的や……」

はやてが呟いた。

ロビーで戦闘を見ていた一同も、ユベルの圧倒的な力を前に言葉が出なかつた。

ユベル

「つまらなかつたな。もつと骨のある戦いを期待してたんだけど……」

六課に帰還したユベルが言う。

十代

「相変わらず、えげつない戦い方だな」

少しは回復した十代が帰還したユベルに言つ。

ユベル

「君の馬鹿正直なテュエルよりマジだよ

十代

「ちえ、言つてくれるぜ」

二人は短い言葉を交わし、六課の宿舎の中に入つて行つた。

なのははかつて無茶なトレーニングなどにより疲労が溜まつてゐるにも関わらず出撃した。

それにより任務中に大怪我を負い、一時は再起不能と言われていた。

かつての自分のようこそさせたくない。

それで基礎を中心とした無茶をしない訓練をしていた。

その話を終えたのち、ティアナはなのはに謝罪し、なのははクロスミラージュの新たなモード、『ダガーモード』を見せて、謝罪した。

十代もなのはの過去をフェイトとはやてから聞いたのだった。

そして、部隊長室には十代、ユベル、達隊長陣、フォワード陣とシヤーリーとリインが集まつていた。

六課のメンバーは十代の3年間の事を若干知っていた。

1年生の時にセブンスターZや三幻魔の脅威と戦った事。

2年生の時に光の結社、破滅の光と戦った事。

3年生の時には、ダークネスと戦い勝利した事などだ。

十代

「俺はこの前行ったアグスタで、スカリエッティの送り込んで来た人工生命体と戦い、このディスクを拾ったんだ。」

十代が人工生命体の残していったディスクをテーブルに置く。

十代

「記録されているのは、俺の3年間の事と、ユベル関連のことだ。何であいつがこんな物を持つてゐるのかは知らないけどな」

六課メンバーは十代の言葉を黙つて聞いていた。

十代

「映像はシャーリーが解析してくれて、いつでも見られる様になつてゐる。シャーリー」

シャーリー

「あつ、はい！」

シャーリーがモニターを操作すると、全員の目の前に巨大なモニタ  
ーが現れた。

そこには今より幼い十代がデュエルアカデミアでデュエルしている映像が映し出されていた。

なのは

「これが、デュエルアカデミアにいた十代？」

フェイト

「何か、今よりも幼いね」

十代

「まあな。でもそんな俺を異世界での出来事が変えた」

はやて

「異世界？」

はやてが聞き返す。

十代

「ああ、今から全部話すぜ。異世界での出来事とゴベルの事をな」

## 第10話 和解と過去（後書き）

次回は、十代の3年間の学園生活の中で一番辛かつた異世界編の話です。

第1-1話 十代の過去～霸王覚醒～（前書き）

過去編長え……

後、三回は続くかも……

## 第11話 十代の過去～霸王覚醒～

十代

「異世界の事を話す前に、まずはユベルの事を話しておいた方がいいな」

十代はそう言いつと腰のデッキケースからユベルのカードを取り出し、テーブルの上に置く。

なのは

「これが、ユベルのカード？」

六課メンバーの視線がユベルのカードに集まる。

十代

「ユベルは俺が小さい頃に使っていたデッキのフェイバリットカードだったんだ」

ユベル

「だが、十代を泣かせたという理由で対戦者を平氣で意識不明の重症に陥らせるなどの事をした。氣味悪がった十代の知人達は十代を仲間はずれにして、十代は孤独な少年時代を送っていたんだ」

十代

「その時の俺はユベルには邪悪な力が宿っているから、ユベルのカードをカプセルに入れて宇宙に飛ばしたんだ」

フェイト

「どうして、そんな事を？」

フェイトが質問する。

質問された十代は『テッキケースからもう一枚カードを取り出し、コベルの横に置いた。

はやて

「これは？」

十代

「こいつは『E・HERO ネオス』俺の『テッキのヒースカード』だ。コベルはこのカードと一緒に宇宙に飛ばされたんだ」

なのは

「どうこいつ事？」

なのはを始め、六課メンバーは首を傾げている。

コベル

「当時、海馬コーポレーションでは、宇宙の波動を取り込んで素晴らしいカードを作つて、『ヒース』が作成したんだ」

その説明を十代が引き継ぐ。

十代

「その時海馬コーポレーションは子供達からカード『ザイン』を募集したんだ。そして、俺の『ザイン』したネオスが採用されて、宇宙へと飛ばされた」

フェイト

「コベルのカードと一緒に？」

フェイトの言葉に十代とコベルが頷く。

十代

「実際にネオスは正義の闇の波動を受けて、今のカードになつたんだ。ネオスのカードには精靈が宿つてゐるし、俺もネオスと一緒にたくさん敵を倒してきた」

ヴィータ

「じゃあ、コベルのカードはどうなつたんだよ？」

ユベル

「十代は僕を宇宙に飛ばす時にこう願つたんだ。邪悪な力を取り払い、正義の闇の波動を受けて清くなつて欲しいと」

はやて

「それで？」

ユベル

「だが、僕は破滅の光の波動を受けて、邪悪な力を取り込んでしまい、カードを入れたカプセルは燃え尽きてしまった」

十代

「そして、俺は両親の手によつて、ユベルに関する全ての記憶を消される事になつた」

十代がシャーリーに田で合図をすると、シャーリーが映像を切り替えた。

十代

「俺達はゴベルの手によつて、異世界へと飛ばされた」

モニターには、異世界の砂漠で十代達がデュエルゾンジと戦つている映像が映つていた。

フェイ特

「ちょっと待つて！ゴベルのカードは燃え尽きかけたんじゃないの？」

ゴベル

「そうひ。だから僕は、様々な人間を使って僕の体を修復させた」

十代

「そして、異世界で俺はゴベルと再会した」

映像が変わり、三幻魔を操るゴベルと十代がデュエルをしている映像になつた。

ゴベル

「僕は後一歩とこゝ所まで十代を追い詰めた」

十代

「だが、そこにヨハンが助けに来てくれたんだ」

映像にはヨハンが十代と合流する所が映つていた。

十代

『ヨハン、お前がこゝに来たつて事は……』

ヨハン

『ああ、遂に来たぜ、レインボーボード「ゴン」のカードがな』

そして、映像が進み、レインボーボード「ゴン」と「幻魔の融合体混沌幻魔アーミタイル」がぶつかり合い、激しい閃光が十代達を包み込んでいた。

なのは

「それで、十代達はどうなったの？」

十代

「俺達は元の世界に戻る事が出来た。けど、ヨハンは戻つて来なかつた」

シグナム

「自分の身を犠牲に遊城達を元の世界に戻したという事か……」

十代

「ああ。そして、俺は再び仲間達と共に、異世界へと旅立つた」

はやて

「ヨハンって子を連れ戻すためにやな？」

十代が頷く。

十代

「だが、俺達が行つたのは、あの砂漠の異世界じゃなかつた。それでも、俺はヨハンを探し求めて、仲間達と異世界を彷徨い続けた」

エリオ

「それで、ヨハンさんは見つかったんですか？」

エリオの言葉に十代は首を横に振る。

十代

「ヨハンは見つからず、しかも、そこでのデュエルは命がけのデュエルだ。負けた方は消滅してしまつ」

スバル

「そんな危ない戦いを十代さん達はやつてたんですか！？」

六課メンバー全員が驚いていた。

十代

「そして、ヨハンが見つける事の出来ない俺は、次第に焦り始め、いつしか仲間達の事を考えずに突っ走っていたんだ」

映像が再生され、闘技場で十代とプロンがデュエルをしている場面が映し出される。

映像が進むに連れて、六課メンバー達はある事に気付いた。

なのは

「あそこは、十代の仲間達が……」

闘技場の高台に、万丈目、剣山、明日香、吹雪が捕らえられているのが映つていた。

十代

『万丈目ーー！ー！すぐに助けてやるからなーー！ー！』

映像の十代が万丈目に呼びかけるが、

万丈目

『十代の馬鹿野郎！！』

十代

『え！？』

万丈目

『お前、俺達と一緒にヨハンを探すんじゃ無かつたのかよ！！』

十代

『あ！？』

万丈目

『勝手に一人で燃えやがって……お前、最初から俺達の事なんか、考えちゃいなかつたんだろう！！』

十代

『違う！それは……』

万丈目

『お前はそう言う奴だ！お前の大国には、最初からお前しかいなかつたんだ！！そんなお前に、友情何ぞを感じて……一緒にやる気になつちまつた俺達の方が、馬鹿だつたんだッ！！』

そして、突然万丈目が苦しみだし、光となつて消えてしまった。

なのは達、六課メンバーはそれを見て驚いた。

なのは達隊長陣達は映像から顔を背け、フォワードメンバーはエリオを除き、両手で口を押さえていた。

なのは

「どうして、万丈目君は消えちゃったの！？」

沈黙の中なのはが小さな声で聞いたが、十代は答えようとした。

ユベル

「対戦相手のブロンが使った『邪心教典』の効果によつて、ブロンがダメージを受ける度に『怒』、『憎』、『苦』、『悲』、『疑』の文字のカードが『邪心教典』に吸収される。『超融合』のカードを完成させるために十代の仲間を生け贋にするために……」

ユベルが説明をして、うちに映像が進む。

ブロン

『トラップ発動！』『ダークネス・ハーフ』……

十代

『何だ！？』

ブロン

『『ダークネス・ハーフ』は自分の場のモンスター一体の攻撃力を半分にし、ダークトークン2体を相手の場に特殊召喚する』

十代

『何のつもりだ！？こんな事をしても俺は……攻撃をするつもりは

無いと言つたはずだ……』

ブロン

『だがそつはいかない。貴様の意志とは関係なく、モンスター達は戦い始めるのだ。トラップカード『暗黒武闘会』発動！！』

それと同時に、映像に映つてゐる十代の場のフュザーマン達が攻撃態勢に入る。

十代

『フュザーマン！？』

ブロン

『『暗黒武闘会』が発動した今、モンスターは全て戦わねばならぬ。最も、このカードが発動したターンには、戦闘でモンスターは破壊され無いがな……』

剣山

『やめるドン！…』

明日香

『助けて！…』

吹雪

『十代君！…』

剣山達が悲痛な叫びをあげる。

十代

『やめる……やめてくれ……フュザーマン』

そして、フュザーマンがプロンの場のズールに攻撃をする。

それに続いて、ダークトーケン2体も攻撃に参加する。

十代

『よせーー!』

フュザーマン達の攻撃は全てズールにヒットした。

プロン

『十代、お前の攻撃に連動して、永続魔法『邪心教典』の効果が発動するのだー!』

プロンの『テッキから』『憎』、『苦』、『悲』のカードが射出され、消える。

十代

『ああー?』

そして、剣山達が叫び声をあげる。

剣山

『兄貴ー! どうして俺達を犠牲にしてまで、フリードの仲間を助けたかったドンー?』

十代

『違うー! そうじゃないんだ剣山ー!』

吹雪

『苦しい……肉体の痛みだけじゃない……友に裏切られ、魂が引き裂かれる思いだ!!』

十代

『吹雪さん……』

明日香

『あなたに裏切られ、葬られる……こんな悲しみを抱く事になるなんて……』

十代

『明日香……』

そして、3人も、さつきの万丈目の様に光となつて消えてしまう。

六課メンバーのほとんどは大粒の涙を流していた。

そして、さりに映像が進む。

暗黒会の魔神レインが十代を追い詰めていた。

ブロン

『まだやる気力があるといつのか?』

ブロンが狡猾な笑みを浮かべながら囁く。

十代

『万丈目、剣山、吹雪さん、明日香……みんなの受けた苦しみは、こんなもんじゃ無かつた……みんなの命を犠牲にして生まれた魔物など……生かしておくかあ……!!』

そして、映像の十代の瞳の色が金色に変わる。

なのは

「あれって……」

その瞳を見た事のあるなのはが声を上げた。

十代

『魔神レイン……お前の所為で俺の仲間は……！友達は……！絶対許さねえ……！』

映像の十代が叫ぶ。

そして映像が進み、ネオスとレインが相打ちする場面が映し出される。

十代

『速攻魔法発動！！』『鎮魂の決闘』！！バトルフェイズ中に破壊されたモンスターをお互い特殊召喚できる！！俺はネオスだ！！お前もレインを召喚しろ！！』

映像の十代がさらに叫んだ。

ブロンが一步引いた。

十代

『レイン！！暗黒界の魔神レインは何度倒しても、俺の怒りは収まらない！！ぶつ倒しても！ぶつ倒しても！ぶつ倒しても！俺の仲間達はもう……蘇らないんだ！！』

ブロン

『……』

十代

『どうしたー早くしろーー』

ブロン

『む、無理だ……』暗黒界へ続く結界通路を使用したター、モンスターを召喚する事は出来ない……』

十代

『召喚しないのなら……行くぞーー』

ブロンはネオスの攻撃によつて、ブロンは敗北し、消えた。

六課メンバー達は映像の十代を見て複雑な感情を抱いていた。

なのは

「（どうして十代は……十代だけ……）こんな経験をしなきゃいけないの?）」

フロイド

「（十代は……私達の過去よりも辛くて残酷な経験をしてる……）

はやて

「（でも、十代の過去を知つてしまつた私達は……どうすればいいんや……）」

しかし、そんな六課メンバー達に追い打ちをかける様な言葉をコベ

ルが言った。

ユベル

「まさか、これで終わりだなんて思っていないよね？本当の戦いはここからだよ？」

スバル

「そんな！？」

ティアナ

「まだ、あるつていつのーー？」

十代

「……エリオとキャロは、席を外した方がいいかもれないな……辛いなら、出て行つてもいいんだぜ？」

十代がエリオ達に声をかける。

キャロ

「いえ、十代さんは……私達の仲間ですから……」

キャロが鼻声で言つ。

エリオ

「僕も……最後まで聞きます……」

エリオが右腕で両手の涙を拭いながら言つ。

十代

「そりが……無理はするなよ？」

「そりが……無理はするなよ？」

十代は短く言った。

なのは

「私達は最後まで聞くよ。辛くなつて、また泣いちゃうかもしけな  
いけど……」

フェイト

「うん、私も最後まで聞く。だから、続けて?」

フェイト達の言われ、十代は話す決意をする。

十代

「わかった、話すぜ……」の後の事、それと『霸王』の事を……

## 第11話 十代の過去～霸王覚醒～（後書き）

ほとんどの場面を、原作から引つ張つて来てしまった……

十代達の言葉で書つた方が良かったんだろうか……

## 第1-2話　十代の過去～霸王消滅～（前書き）

過去編第一弾です！！

過去編は次回で終わりにしたいなと思います。

## 第1-2話 十代の過去～霸王消滅～

十代

「プロンとの戦いの後、俺は超融合のカードを拾って、霸王の声を聞いたんだ」

なのは

「霸王って毎回十代の目が金色になつた時のあれ？」

十代

「霸王は俺に言つたんだ。『悪を倒すためなら悪にでもなれ。この弱肉強食の世界を力によつて支配しろ』って……」

フェイト

「力つて？」

十代

「超融合のカードの事だ」

十代が超融合のカードをテーブルに置いた。

はやて

「これが、さつきの映像に映つてた奴が完成させよつとしたカード？」

十代

「ああ」

シグナム

「そもそも、霸王とは一体なんだ？お前の事を操りつとした敵の一種か？」

シグナムの問いに十代は首を横に振る。

十代

「霸王は、俺の心の闇が創り出してしまった、俺の心の奥底に眠つていた第一人格の事なんだ」

十代はさらに続ける。

十代

「霸王は、俺に超融合のカードを使って、異世界を力によって支配しようと語りかけてきた」

フェイト

「でも、そのカードは映像で見たときは真っ白なカードだったよ？完成させるとかつて言つてたけど、十代が完成させたの？」

十代

「ああ。正確には、俺の心と体を支配した霸王が完成させた」

なのは

「どういう事！？」

十代

「異世界には、たくさんの中の精霊達がいる。その精霊達を殺して、その魂を超融合のカードに吸収させる事で、超融合を完成させたんだ」

スバル

「それって、間接的に十代さんがその精霊達を殺したって事になるんじやないですか！？」

十代

「ああ。霸王に支配された俺は精霊達の魂を吸収させて超融合の力一ドを完成させた……」

キヤロ

「その後は、どうなったんですか？」

十代

「俺の事を助けに来たジムとオブライエンって奴が俺の事を探しに来てくれたんだ」

十代がシャーリーに合図をすると、シャーリーが映像を再生する。

ジム

『霸王！－！－I'm coming back－！－俺とデュエルを！－！』

映像ではジムがデュエルディスクを構えており、ジムの目の前には五人の側近が立っていた。

そして突然、霸王城の扉が開いた。

扉の奥から出て来たのは黒い鎧に身を包んだ十代だった。

なのは

「あれが、十代！？」

フェイト

「これが……！？」

はやて

「信じられへんけど、これが……」

スバル

「十代さんは思えません……」

ティアナ

「でも、この十代さんは……」

キヤロ

「す、ぐく……怖いです……」

霸王を見たなのは隊長陣は霸王のプレッシャーに絶句し、フォワード陣は霸王を見て怯えていた。

モニターには霸王がジムを『インフェルノ・ウイング』、『マリンヤス・エッジ』で痛めつけている映像が映っていた。

だが、ジムは『地球巨人ガイアプレート』を召喚し、霸王を後一歩という所まで追い詰めてた。

ジム

『今だ！！戻つて来い！！マイフレンド！』

ジムがそう呼びかけるが、霸王はデュエルを続けた。

霸王

『手札を1枚墓地に送り……見せてやろう。心の闇が創り出した最強の力の象徴を！－絶対無敵！－究極の力を解き放て！－発動せよ！－超融合！－！』

霸王が遂に超融合を発動させる。

霸王

『超融合を用いれば、自分フィールド上のモンスターと、フィールド上のあらゆるカードを融合する事が出来る』

ジム

『それじゃあ、防ぎ様が無い！なんてカードなんだ……！？』

霸王

『その通り。超融合をカウンターする事は出来ない。完全なる勝利を導く絶対的な力！その力の前にはあらゆる物は無力！－！』

ヘルゲイナーとガイアプレートが黒い渦の無効に消える。

霸王

『出でよ！－E－HERO　　ダーク・ガイア！－！』

そして、ダーク・ガイアの攻撃で、ジムは敗北し、光となつて消えた。

なのは

「十代は、どうやって霸王の呪縛から解放されたの？」

十代

「この後、オブライエンが俺の事を自らを犠牲にして、助けてくれたんだ」

映像が霸王城で霸王とオブライエンが向かい合つている映像に切り替わった。

霸王

『お前か。よくここまで無事に来られたな』

オブライエン

『出陣直前にまさか、本丸が襲われるとは思つていなかつたようだな。……今なら誰にも邪魔されない』

霸王

『俺から逃げ出したお前に、立ち向かう勇氣があるといつのか?』

オブライエン

『力だけで比べるなら、俺はお前に、到底及ばないだろう……力の前には友も情けも無い。ただ強い者が生き残る世界。力とはそう言う物だと思っていた……だから俺はお前に恐怖し、逃げ出した』

霸王

『そこまで解つていながら、何故戻つて来た?』

オブライエン

『それは……違つていたからだ。俺は気付かされた。力には2つある。それは……誰も求めない力と、誰もが求める力だ。誰もが求める力は、無限の勇氣を与えてくれる。俺は今、俺の力を求めてくれる人たちの与えてくれた勇氣の力でここにいる!』

霸王

『欺瞞だな。お前は勇者ではない。ただの負け犬だ、その過ちは、死を持つて体現する事になる……』

オブライエン

『十代。俺は確信している。今の俺は絶対に心の闇に陥る事は無い……そしてこの境地を、皆は正義と呼ぶんだと！…』

霸王

『勝ち残る物が正義だ！』

霸王とオブライエンの戦いが始まる。

オブライエン

『十代！お前は何とも思わないのか！？ジムは……ジムはお前のために……』

霸王

『俺は、力の示す道を全うするのみ……』

オブライエン

『それが、この世界を闇に導く道だとしても、構わないのか！？闇に墮ちた心は孤独だ……何故それが解らない！』

霸王

『俺は孤独を恐れていない。孤独こそ真実。誰も他人の心の奥底にある闇に立ち入る事は出来ない……』

オブライエン

『十代、かつてのお前は違つたはずだ!』

霸王

『成長したんだよ』

オブライエン

『心の闇に墮ちる事がか!?』

霸王

『負け犬の戯れ言に真実は無い!』

全員が霸王とオブライエンの会話を聞いていた。

そして、霸王とオブライエンの『トヨエルは激しい攻防が続いた。

オブライエンが霸王を追い詰めれば、逆に霸王がオブライエンを追い詰める。

霸王

『何い!?』

オブライエン

『うおおおおッ!』

オブライエンが霸王の元へと走り、霸王に飛びかかる。

霸王

『む、無駄だ……貴様のモンスターを破壊され、貴様のライフは0となる……はツ！？』

オブライエン

『だが俺も、最後の作戦を発動させている！墓地の『ヴォルカーツク・カウンター』の効果にて、俺が受けたダメージと同じだけ、お前もダメージを受ける！！』

モニターを赤い閃光が進る。

霸王

『ぐああああああツ！！』

モニターからは霸王の叫び声の後、巨大な爆発音が聞こえ、映像が途切れ。

なのは

「この後、十代の中の霸王は消えたの！？」

六課メンバーを代表してなのはが聞く。

十代

「ああ」

フェイント

「それじゃあ、十代は解放されたの？」

十代

「ああ。だけど、俺はこの後、『融合』のカードが使えなくなるんだ……」

なのは

「どうして?」

十代

「霸王の人格の時に、人々を虐殺していた時の記憶が蘇ってしまうから、俺は無意識の内に『融合』が使えなくなつてたんだ……」

スバル

「でも、十代さんは復活するんですよね?」

スバルの言葉に六課メンバーがそれはまずいという顔をした。

ティアナ

「(バカスバル)! あんたこの空気の中なんて事聞いてんのよ! -」

スバル

「(で、でも……)」

しかし十代は気にしているようだつた。

十代

「ああ。俺の仲間や俺のヒーロー達に励まされて、俺は復活を果たしたんだ。再会したヨハンを救つために……」

シグナム

「お前が探していた奴が見つかったという事か?」

十代が合図をするとシャーリーがモニターに映像を映す。

なのは

「え……」

フェイト

「これが……」

映像にはユベルに取り憑かれたヨハンが映っていた。

そのヨハンを見た六課メンバーはまたも絶句する。

今映っているヨハンは、先程の映像で見たヨハンとは違い、別人と言つていい程、邪悪な笑みを浮かべていたからだった。

第1-2話　十代の過去～霸王消滅～（後書き）

難しかつた……

次回はヨハン救出～ユベル決着の予定です。

予定通りには行かないかもしませんが……

## 第1-3話　十代の過去～ヨハン救出～（前書き）

結局、バーニャハンとバーニャベルを分ける事は出来ませんでした。

2話に分けた方が落ち付くと思ったので……

## 第1-3話 十代の過去 ～ヨハン救出～

モニターにはコベル城にて十代とヨハンが向かい合っている映像が映っていた。

ヨハンはコベル城の中心に浮いている椅子の上に座っていた。

ヨハン

『やあ、待っていたよ。……十代』

ヨハンが邪悪な笑みを浮かべる。

ヨハン

『ちょうど今、ビンテージ物の心の闇をくわいだくなつてねえ……』

なのは

「これが、ヨハン君なの？」

フエイト

「どうしてこんな風になつちやつたの？」

十代

「このヨハンはコベルに支配されたヨハンなんだ」

なのは

「取り憑かれているってこと？」

十代

「まあ、そんなことだ」

十代達が再びモニターに目を向ける。

ヨハン

『フフフ……いい表情だ。疑念、憎悪、殺意……まさに霸王たる高見に達したお前にふさわしい。俺も親友として、同じ色に染まる事が出来た事を誇りに思つよ』

そつ言つて、ヨハンが立ち上がり、十代が身替える。

ヨハン

『来いよ、十代！共に傷付け合おう……』

ヨハンが椅子から地面に向けて歩いてくる。

十代

『茶番は止める……ユベル……』

映像の十代が叫ぶ。

そしてヨハンが足を止める。

十代

『俺は、ヨハンを取り戻すためにここまで来た！今すぐヨハンの体を解放しろ！…』

ヨハンが地面に移動する。

ヨハン

『フフフ……それはできないな。今の僕はユベルであり、ヨハンで

もある……。この体は親友である君と、激しく傷付け合ひ事を望んでいるのぞ』

十代

『ふざけるな……それ以上でたらめを言つと、容赦しないぞ……』

ヨハン

『容赦? フフ……大歓迎だよ……お互い、手加減無しで行こうじやないか』

ヨハンが十代に向かい合う事の出来る位置に移動しテュエルディスクを構える。

ヨハン

『さあ!』

だが、十代は動かなかつた。

ヨハン

『さあ、どうした十代。君の大好きなテュエルじゃないか。怖じけづいたりして、がっかりさせないでくれよ……』

ヨハンが狡猾な表情を浮かべる。

そして十代がヨハンに向かつて走り出す。

十代はヨハンとテュエル出来る位置まで来ると足を止めた。

十代

『俺は、自らの意志の元に戦う……』

十代が『ユエルディスクを展開させる。

ヨハン

『そうこなくけりや……』

十代

『頼むみんなーー!ヨハンを助けるために、力を貸してくれーー!』

十代の声に応するように十代の足下が白く光る。

ヨハン

『フフ……気合い十分だね』

十代

『ありがとうー!俺のヒーロー達ーー!』

ヨハン

『もういいかい?待ちくたびれたよ……仲間だなんて……僕といつものがありながら……』

十代

『ユベル……!』

十代がヨハンを睨む。

十代 & ヨハン

『『デュエル!ー!』』

二人のデュエルが始まる。

ヨハン

『フフフ……命を懸けて取り戻そうとした大切な友達を傷付ける……それでこそ、僕の愛しい人、遊城十代……』

デュエルが始まり、十代は遂に融合を使用し、『フレイム・ウイングマン』を召喚する。

なのは

「『融合』……使えたんだ」

フェイト

「良かつた……」

なのは達は『融合』を使い、完全復活を果たした十代を見て感動する。

映像では十代が『フレイム・ウイングマン』の炎と共に、ヨハンの心の闇に飛び込む瞬間が映っていた。

スバル

「これは？」

十代

「ヨハンの魂がヨハンの心の闇に閉じ込められているかもしけないと思った俺は、『フレイム・ウイングマン』の力を借りて、ヨハンの心の中に飛び込んだんだ」

リイン

「それで、ヨハン君はいたんですか？」

十代 「いや、ヨハンは心の闇にはいなかつたんだ……」

シグナム

「それでは、どこに?」

十代

「ヨハンの魂は『テッキ』の中にいたんだ」

モニターの映像が進み、『フレイム・ウイングマン』の攻撃が終わった後の映像が映つっていた。

ヨハン

『フフ……わかるよ十代。君は本気なんだ。本気で僕を傷付けようとしているんだ』

そのヨハンのセリフに六課のメンバーはドン引きだった。

ヴィータ

「何だ……こいつ……?」

ユベル

「まあ、その男の中身は僕だからね。仕方ないさ。フフフ……」

モニターを見ていたユベルが笑いながら言つ。

リイン

「すごく不健全だと思います……男の人の体を使って言つ辺りが……特に……」

しかし、映像のヨハンは喋り続ける。

ヨハン

『フフフ……君も嬉しいんだろう？愛する者と本気で傷付け合ひ事が……でもどうせなら、何故僕に対しても、これぐらい本気になってくれなかつたんだい？』

十代は答えない。

ヨハン

『どうして黙つているのさ？僕には何も答えてくれないのかい？ねえ、十代？』

しかし十代は何も言わない。

ヨハン

『冷たいねえ……なんて冷たい日なんだ。いつなつたりといふわからせてあげるよー！』

ヨハンの返しのターンでヨハンが一気に形勢を逆転させる。

ヨハン

『フフフ……これでわかってくれたかい？君を世界で一番愛しているのは、この僕だという事が』

十代

『へへへ……』

映像の十代が笑う。

十代

『この程度じゃやられない！今度はこっちから行くぜー・ゴベル！…』

ヨハン

『いいよ。もっともっと痛みを分かち合おう』

十代

『フツ』

十代も負けじと、ヨハンに攻撃をする。

十代

『バトル！ネオスでダイレクトアタック！…ラス・オブ・ネオス！』

！』

しかし、ヨハンは笑う。

ヨハン

『フフフ……十代、最高だよ……君を命を懸けて守ろうとした大切な人をこんな風に傷付ける事が出来るなんて……やはり君は霸王だ。僕にとって、永遠の憧れの存在だよ。大好きだ……大好きだよ……』

十代……』

そしてヨハンは遂に『A宝玉獣』を場と墓地に七体揃える。

ヨハン

『フフフ……行くよ十代。出でよー！『究極宝玉神 レインボー・ダーケ・ドリゴン』ー！』

遂に『レインボー・ダーク・ドラゴン』が現れる。

その禍々しい姿に六課メンバーは狼狽する。

十代 「そして、ヨハンの魂はこのモンスターの中に閉じ込められていたんだ」

フェイト

「え？」

十代 「ユベルが造り出した暗黒の空間。それはレインボー・ダーク・ドラゴンの中に存在していた」

なのは  
「そんな所から、どうやって助けるの？」

十代

「レインボーダークドラゴンの闇を取り払えば、ヨハンは帰つてくれる。でも、それは簡単な事じゃない。  
。でも、俺のデッキにはそれを可能にするカードが一枚だけあったんだ」

映像が進み、十代がレインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃により、ライフを300まで削られている場面が映し出された。

十代

『まだだ！』インスタント・ネオスペースの効果により、デッキから、ネオスを特殊召喚！』

十代の場にネオスが現れる。

ヨハン

『またそいつか……よっぽどお気に入りなんだね。そのモンスター……一枚カードを伏せ、ターンエンド』

十代

『俺のターン！ドロー！』ホープ・オブ・ファイフス！墓地から『E・HERO』を5枚選び、デッキに加えて、シャッフルする。そして、カード2枚ドロー！……ツ！？』

映像の十代はドローしたカードを見て顔色を変える。

モニターを見ていたなのは達もその様子を黙つて見ていた。

そして、その時はやつて來た。

十代

『速攻魔法『超融合』発動！！』

映像を見ていた六課メンバー全員が息を飲んだ。

なのは

『超融合つて……！？』

フェイト

『十代を地獄に墮とした、暗黒のカード……』

エリオ

「それを十代さんは遂に……」

十代

「俺はこの強大な力に支配され、自分を見失い、そのために、取り返しの付かない多くの物を失つて来た……でも、俺は消えてしまつたみんなのために……霸王の力を支配してでも、大切な物を守り抜くつて決めたんだ……」

リン

「十代さん……」

映像では超融合発動させた場に黒い竜巻が現れていた。

十代

『このカードは手札を1枚墓地に送る事で発動！俺の場の『ネオス』と、フィールド上のもう一体、『レインボー・ダーク・ドラゴン』がデッキの壁を越えた、究極最大の進化を遂げる！…』

黒い風が場に現れ、レインボー・ダーク・ドラゴンがレインボー・ドラゴンへと変化する。

そして、ヨハンの体からコベルが現れる。

十代

『出でよー・レインボー・ネオス！』

十代の場に巨大なモンスター『レインボー・ネオス』が現れる。

ヨハン

『十代……！？』

十代

『ヨハン！大丈夫か！？』

ヨハン

『十代……俺は……助かったのか……！？』

十代と本当のヨハンが再会する。

しかし、その再会を邪魔するようにユベルが大笑いをする。

ユベル

『この時を待っていた。全て僕の計算通りだよ』

十代

『何だと！？』

ユベル

『もうそんな奴の体なんてどうだっていい……くれてやるよ。一番  
欲しかった物が手に入ったからね』

十代

『え！？』

ユベル

『君を霸王にする事よつて完成させた最強のカード。宇宙を統べる  
究極の力をね』

ユベルが『超融合』のカードを十代に見せる。

十代

『『超融合』！？何故、お前の手に！？』

ユベルは伏せていたカード『ラスト・トリック』によつて十代の墓地から『超融合』を奪い取つていたのだ。

ユベル

『今までのデュエルは余興さ。お楽しみはこれからだよ。フフフ……』

そして、このデュエルはユベルが伏せていたもう一枚のカード『バスター・サウザンド』によつて引き分けとなつた。

ユベル

『さあ、始めようか十代……僕達の本当の時間をね……』

遂に、十代とユベルが決着を付ける時が来たのだった……

第1-3話 十代の過去 ～ヨハン救出～（後書き）

次回、遂に十代の過去編が完結します！

お楽しみに～！

第14話 十代の過去～ゴベルとの和解～（前書き）

過去編、遂に完結です！！

## 第14話 十代の過去～ユベルとの和解～

十代

「これが、俺とユベルの最後の戦いだ」

映像が再生される。

六課メンバーも何も言わずにモニターを見ていた。

ユベル

『どうして、そんな怖い顔してるの?』

十代

『俺の仕打ちが憎かつたのなら、俺にだけ復讐すれば良かったんだ』

ユベル

『憎い?復讐?何を言つてるんだ?言つただろ?・全ては十代に喜んで貰えると思って、努力してきたことなんだ』

十代

『俺が喜ぶ?仲間達が傷付いて、苦しんで消えていつているの?...!』

ユベル

『だつてそれが愛だ?・君を苦しめて、愛の深さを伝えたかった

んだ『

十代

『ユベル……お前には、何を言つても無駄なのか！？』

ユベル

『デュエルしようよ……もつと苦しみてあげるよ。苦しみと悲しみの中でこそ、互いの愛を理解し合えるんだよ？』

十代

『ああ。ただし、理解し合つためではなく……』

十代がデュエルディスクを構える。

十代 & ユベル

『『デュエル！…』』

二人のデュエルが始まる。

しかし、ユベルの特異な戦術に十代は惑わされ、次第に追い詰められていく。

ユベル

『どうしたんだい？なんで攻撃して来ないんだ？もつと傷付け合おうよ』

十代

『俺の所為でどんなに傷付いていたのか、お前の苦しみはよく分かつた。だから、もうこんな悲しいデュエルは止めよ！…』

ユベル

『勘違いしてないかい？僕は傷付きながら喜んでいたのさ……君の愛を感じてねえ』

十代の説得は通じず、ユベルの歪みは広まつていく。

そして、十代は合流した翔の言葉をきっかけに霸王を蘇らせる。

十代

『一度、俺の心の中の闇の霸王は死んだ。しかしユベル……お前を倒すために、俺の中の霸王を蘇らせる』

映像の十代の瞳の色が金色に光る。

なのは

「あれって！？」

フェイト

「霸王は死んだはずでしょ？」

十代

「ああ。でも霸王も俺も、同じ、一人の人間の一面だ。あの時は、正義の心だけではユベルに勝てなかつた。だから俺は、一度は死んだ……いや、一度は消えた霸王を蘇らせて、完全な俺としてユベルと戦つた』

映像がさらに進む。

十代

『ユベル。お前が光の波動を受け、悪に染まり、一人復讐の思いに

燃えている間、俺にはたくさん仲間が出来た

ユベル

『えつ！？』

十代

『そして、みんなから教えられたんだ。本当の愛とは、宇宙を包む  
ように広く、大きく深い。お前の愛は、独り善がりの思い込みに過  
ぎない！』

ユベル

『思い込みだつて！？』

そして十代がE・HEROをネオスペーシアンに入れ替える。

十代

『ネオスペーシアンもまた俺の仲間だ。正義の闇の波動で悪の光の  
波動を消し去つてやる！』

ユベル

『思い込んではいけなかつたのかい？愛されていくと思わなければ  
あの辛さに耐えることなんて出来なかつたんだよ……それなのに、  
十代の愛をそんな奴らが、僕から奪つていつたんだね……』

ユベルが十代に視線を向けるが、霸王となつた十代はそんなことは流されなかつた。

そして、霸王と一体化した影響か、プレイイングにも変化が現れ、ユ  
ベルに反撃をする。

ユベル

『フフフ……嬉しいよ……これが君の愛なんだね?』

十代

『まだそんなことを言つてはいるのか……今の俺はお前へ対する怒りでいっぱいだ。そして、お前が覚醒させた霸王の力で、お前をこの宇宙から消滅させようとしている!!--』

ユベル

『やだねえ……僕の十代はそんな非常にはなれないよ……』

十代

『人は優しいだけでは大切な物を守れない。俺は大事な物を守り抜く覚悟をした。たとえ鬼、悪魔と呼ばれようとも……!……俺は今になつて知つた。覚悟こそ力だ。所詮、仲間との結束を持たないお前に、勝ち目は無い!!--』

十代とユベルのデュエルは続く。

一進一退の攻防が展開される。

さらにユベル第一形態が召喚され、十代はさらに追い詰められる。

ユベル

『そんなに僕が嫌いかい……?』

十代

『ツー?』

ユベル

『僕にとって、十一の次元の宇宙とは、十代と共に生きるための空間。だからこの宇宙を愛で満たそうとした……でも、君が仲間を呼びそこまで僕を排除しようと言つのなら、もうこの宇宙を愛で満たす必要も無い……いや、もうこんな世界すらこらない』

十代

『コベル、お前は！？』

コベル

『終わらせよう、この宇宙を。君との空間も。君との時間も。フフフ……楽しかったよ、十代』

そしてコベルは十代と再会するための経緯を話した。

コベル

『悲しいよ十代。君がこんなに分からず屋だったなんて……君が悪いんだよ。僕の愛をわかってくれない君なんていらない！この宇宙もいらない！みんな……みんな消えちやえ！！』

十代

『コベル！そんな真似させるか！！』

再び十代とコベルのデュエルが再会する。

そして、コベル第一形態の効果によつてネオスペーシアンは全て破壊された。

コベル

『十代！君の大好きなネオスペーシアンの仲間は一匹もいなくなつたよ？所詮僕の愛の前にはあんな奴らとの友情なんてどんなに頼り

ないものか……さあ！最後のチャンスだよ？思い出してよ……十代！』

十代

『それはどうかな？』

不意に十代が笑う。

ユベル

『何！？』

十代

『『ネオスペーシアン』も、『E・HERO』も『ユエル』を通して出会った素晴らしい仲間達だ。でも、俺にはもっと多くの仲間達がいる！』

ユベル

『くつ……ー？』

十代

『ヨハン、俺の素晴らしい仲間の一人……俺はお前の思いを引き継ぐ！『ユエル』を通して、必ずみんなを救つてみせる！』

その言葉は映像を見ている十代とユベル以外の全員に深く響いた。

エリオ  
「十代さん……」

スバル

「とても……」

リイン

「カツコいいです！！」

エリオ、スバル、リインがこの空氣の中、目を輝かせる。

十代

『レインボー・ドラゴンとネオスよ！俺とヨハンの友情の証を示してくれ！！』

そして十代は遂にレインボー・ネオスを召喚する。

十代

『融合召喚！出でよ！レインボー・ネオス！！』

そしてレインボー・ネオスの効果を使い、ユベル第一形態を場から消し去ることに成功するが、ユベルの究極の姿が現れる。

さらにユベルの声は男の声へと変わる。

そして激しい攻防の末にネオスの強烈な一撃がユベルを襲った。

ユベル

『うれしいよ……十代』

ユベルの声が元に戻る。

十代

『何！？』

ユベル

『君の思いがやつと僕に届いた。その憎しみは愛の裏返しなんだねえ……僕の能力は攻撃で決して傷付かないこと……自分は傷付けられずに他人を傷付けることしか出来ない……そんな僕は誰の愛も受け入れることはなかつた……』

ユベルがそう言つと周りが紫色の靄に包まれ、モニターには何も映らなくなつた。

なのは

「何? ビリしたの?」

十代

「ここからのこととは流石に入つてないか……」

シャーリー

「記録されてるのはここまでなんです……すみません」

十代

「シャーリーが謝る事じやないさ……」

ユベル

「なら、僕の力を使って直接彼女達の頭の中にこの事を教えてあげてもいいよ?」

ユベルが提案する。

十代

「……わかった。頼む」

十代が答えるとゴベルの額の目が光り始める。

なのは

「何！？」

フェイト

「頭の中に何かが……」

六課メンバー達は頭の中に入つてくる映像を見る。

そこにはとある城の一角で王と思われる男と一人の子供が話している場面が映し出された。

なのは

「これは……！？」

王

『ゴベル、よく聞け』

ゴベル

『はい』

王

『宇宙は無より生まれ、光と闇とに別れた。光は何処かへと消え、闇は多くの命を育んだ。しかし、圧倒的な力を持つ破滅の光は、いつか優しい闇を侵略するために再び輝き始めるだろう……その時、光の波動を退け、優しい闇を守るための力が必要だ』

ゴベル

『はい』

王

『お前の友はその心の中に強力な霸王の力を持つて生まれた。その力はやがて破滅の光に包まれた宇宙を救うだろ。しかし、少年の心が大人に成長するまで、誰かが彼を守つてやらねばならない』

ユベル

『王よ、僕にその役割をお申し付けください』

ユベルが名乗り出る。

王

『しかし、少年の心を守るためにには誰も傷付けられぬ固い鱗の鎧を身に着けねばならぬ。そなたの若く美しい肉体は、一いつ瞬と見られぬ醜い竜の姿になってしまつのだぞ?』

ユベル

『構いません。彼を守るために…』

そして場面が変わり、暗い牢獄の様な部屋で、ユベルが今の姿になるための手術を受けている場面に変わる。

エリオ

『ユベルさんは、それで、今の姿に…』

キヤロ

『守りたいひとのために…』

六課メンバー達はその光景を見るのに耐えられず、涙を流す。

少年

『ユベル!!』

突然、部屋に一人の少年が入ってきた。

スバル

「あれは、十代さん！？」

ティアナ

「いや、違つわ。あれは……誰！？」

十代

「」の記憶は、俺が俺として生まれてくる前の記憶だ

フュイト

「それって、あの子は十代の前世って事？」

十代

「まあ、やつなるな」

その事実に六課メンバー全員は驚きを隠せなかつた。

十代とユベルは前世から愛を誓いあつていたのだ。

自分達が十代と知り合う遙か昔から愛を誓い合っていたのだ。

そして、さらに場面が変わり、海の近くの岩の上で少年とゴベルが抱き合っている場面になる。

少年

『君は、僕の為に……』

ユベル

『いいのです。あなたが子供から大人になるまでお守りするのが僕の努めなのですから……』

少年

『ユベル、約束するよ。僕の愛は君だけのものだ。誰が何と言おうと、僕は君だけを永遠に愛し続ける』

ユベル

『そして僕は精霊となつた後も十代を守るうとした。だけど、その愛はだんだん歪んだ物となつてしまつていた……』

少年達の映像は消え、十代とユベルが『デュエル』をしている場面に切り替わる。

ユベルは遂に超融合のカードを手にしてしまつ。

そしてユベルは『能力カード』『チーン・マテリアル』と『超融合』を使い、十一の次元を束ね、超融合女神を誕生させ、宇宙を破滅に導こうとする。

ユベル

『『終わりだ！全て終わりにする事で僕は君の愛を永遠に独り占めする事が出来る……』』

十代

『その通りだ』

ユベル

『『何！？』』

十代

『だが、超融合するのは十一の世界じゃない。お前と俺の魂だ！』

ユベル

『何だつて！？』

十代は最後の農カード『スピリチュアル・フェージョン』により、融合するモンスターは十代が選択する事になったのだ。

十代

『さあ、ユベル。悲しい魂の旅は終点に着いた。もう終わりにします。さあ……』

そして十代の体から少年の姿が現れ、ユベルに語りかける。

少年

『僕たちが戦わなくちゃ行けないのは、宇宙を破滅に導く光の波動。君の魂を歪めてしまった光の波動を追い払い、霸王十代の魂が君に乗り移る……』

十代

『もしされで俺という存在がなくなってしまつとしても、俺は構わない……『超融合』を発動！！』

そして十代とユベルは黒い渦の向こうへと消えた。

場面が変わり、ユベルが十代を抱きしめていた。

ユベル

『一つの魂は一つになつて、もつ決して離れる事は無いんだね……僕は今、君の愛に包まれてゐる……共に戦おう！ 宇宙を破滅に導く光の波動と……』

ユベルは涙を流し、十代と一つになつて、光となつて飛び立つた。

そして、なのは達の意識も元に戻つた。

十代

「これが、俺が異世界で経験した事だ」

十代が説明を終わる。

なのは

「この後は？」

なのはが口を開いた。

なのは

「この後十代はどうなつたの？ 十代の仲間達とは再会できたの？」

十代

「ああ。俺を含めて全員元の世界に戻る事が出来た。でも……

はやて

「でも、なんなん？」

十代

「異世界での出来事の後、俺は『大切な物』を失ってしまったんだ……」

フェイト

「『大切な物』？」

ヴィータ

「お前の仲間達はみんな帰つてきたんだろ？」

ヴィータの問いに十代は首を横に振る。

十代

「目に見える物じやないんだ。ずっと俺の中にあつて、俺が大人になるのと同時に次第に消えていつてしまつたものだ……」

六課メンバーは十代が何を失つたのかがわからなかつた。

ユベル

「十代は異世界での戦いで命がけの戦いをしてきた。そして、子供から大人になつた」

十代

「その所為で俺は『デュエルを純粹に楽しめなくなつた……』

なのは

「十代が失つた物つてもしかして、『純粹に』デュエルを楽しむ気持ち』？」

十代

「ああ。でも、ちゃんと取り戻したんだぜ？」

十代は明田香や剣山、レイとのペアデュエルの事、伝説の決闘者『武藤遊戯』との『本当の卒業デュエル』の事を話した。

それを聞いた六課メンバーも笑顔になる。

いつして、十代の過去の話は幕を閉じたのだった。

## 第14話 十代の過去～コベルとの和解～（後書き）

長かった……

最後がグダグダに……反省してます……

色々書きたかったけど、今の自分ではこれが限界でした……

心残りがあるとすれば、十代が融合を使えるようになつたきっかけを書けなかつた事ですね……

機会があれば書きたいと思つています。

書けるかどうかはわかりませんが……

## 第15話 外出～女の戦い～（前書き）

久しぶりの投稿です！！

今回はちょっと短いです……

すみません！！

そして気付いたら10万PV超えていました。皆さん本当にありがとうございます！！

## 第15話 外出 ～女の戦い～

十代が過去を話して数日が過ぎた。

この日の朝、フォワード陣の第2段階の見極めテストで4人とも見事に合格した。

そのご褒美として、訓練は明日からとなり、今日は丸一日休み。

4人は街へ遊びに出掛ける事になつてていたのだった。

そして、十代は……

十代

「あ～平和だなあ……」

ヴァイス

「何、爺さんみたいな事言つてんだよ」

ヴァイスが十代の言葉にツッコミを入れる。

ヴァイス

「お前もそんなとこ座つてないで、街に出ればいいじゃんか」

十代

「やっぱ言つけど、俺はここ之外の世界を知らないし、行つたつて何すればいいのかわからんないんだよ」

ヴァイス

「じゃあ、誰かに付いて来てもうえぱいいだろ？お前なら楽勝だろ？」

十代

「樂勝つて？」

ヴァイス

「……もひこー」

ヴァイスはため息をつく。

十代がヴァイスの反応に首を傾げていると、リインが飛んでくる。

リイン

「あつ！十代やん！」んな所に居た！」

十代

「どうした？ 何かあつたのか？」

リイン

「ほんとこでのんびりして……朝食は？」

十代

「いや、まだだけど？」

リイン

「そうですか。私もまだなので、一緒に行きましょう」

リンが十代の右手を両手掴み、引っ張る。

小さいくせにやけに力が強かつた。

その力に抗う事が出来ず、十代はただ引っ張られるだけだった。

十代

「あ、おいー待てって。引っ張るなよーー！」

リン

「隊長達も今朝食を取っている所なので一緒に行きましょう」

十代

「えー」

引っ張られる十代を見て、ヴァイスは笑っていた。

食堂に引っ張られた十代はなのは達の居る席へ着いた。

十代の右にはなのは、左にはフェイトと、六課のファンクラブ勢に  
とつては夢の様な位置である。

十代

「いっただきまーすーー！」

十代が食事をする。

なのは

「……」

フュイト

「……」

十代

「ん？ どうした？」

二人が自分を見ている事に気付いた十代が問うた。

なのは

「え？ い、いや……別に……／＼／＼」

フュイト

「な、何でもないよ……／＼／＼」

二人とも顔を赤くして顔を逸らしてしまつ。

十代

「？（あ……そういうえば）」

十代は自分の過去を話してから数日後、なのは達（主に隊長陣）の反応がおかしい事を思い出したのだ。

顔を赤くして顔を逸らしたり、黙つたりと個人によつて反応は違つたが。

十代

「（都合でも仕方ねえか。具合が悪いのかもな）」

十代は頭の中で血口元結して食事を再会した。

十代がのんきに食事をしてこる中、女性陣の頭の中は大変な事になつていた。

なのは

「（まだ顔が熱い……どうひかわ……今日一緒に出掛けないつて誘うべきかな……？）」

フロイト

「（一緒に出掛けないつて誘おつかな？でも、他のみんなも同じ事考えてそうだし……）」

はやて

「考える事はみんな一緒に……女の戦いやなあ……）」

リイン

「（みんなが十代さんを狙つてこるのはわかりますけど……）」

「（近十代さんと一番多く接してこるのはリインです……みんなには負けません！……十代さん）」

ヴィータ

この後、隊長室で誰が十代と一緒に出掛けるかを決める戦いが繰り広げられたとか……

第15話 外出 ～女の戦い～（後書き）

十代

「何かみんな最近変だよな。俺嫌われてんのかな？コベル、俺はどうすればいいと思う？」

コベル

「一度爆発しin」

十代  
「え？」

## 第16話 休日と新たなる脅威（前書き）

更新が久しぶりなので、おかしな所があるかもしれません。

見つけたら描描してくれると嬉しいです！！

それと、しばらぐまGXの方を優先して更新するかもしれません。

## 第16話 休日と新たなる脅威

？？？

「わい、この街に、十代君がいる…………」

その男は森からリラードチルダを見下ろして、わいついた。

？？？

「早く彼に会わなければ…………」

十代

「俺と街に？」

朝食（エビフライ定食）を食べていた十代はフェイトに声をかけられたのだ。

フェイト

「うん。十代もここに来て結構経つけど、街の事とか、全然知らないでしょ？」

十代

「まあ、そうだな」

フェイト

「それに、どうに何があるのかとかを理解しておけば、買い物も楽

になるし、緊急出動した時とかにも、すぐに動けるでしょ。」

フュイトが続ける。

十代  
「ああ。なるほどー。」

説明を聞いた十代が納得する。

フュイト

「私、今日時間空いてるから、街を案内してあげる」

十代

「本当かー? じゃあ、頼むぜー。」

十代の返答にフュイトは心の中で喜んだ。

フュイト

「じゃあ、私、車の用意するから、玄関で待つてて」

十代

「おー! また後でな」

フュイトと一寸別れた十代は支度をするために部屋へ戻った。

十代

「なあ、ゴベル。お前なんでそんなに笑いを堪えてるんだ?」

ゴベル

「いや……なんでもないよ……」

薄暗い部屋に白衣を着た一人の男が目の前のモニターを眺めていた。

男の名前はジエイル・スカリエッティ。機動六課が追跡している犯罪者である。

スカリエッティの見ているモニターには、なのは達隊長陣とフォワード陣そして……

スカリエッティ

「ふむ。やはり、厄介なのはこの男、遊城十代か」

？？？

「その身に精霊の力を宿す者……ですか？」

スカリエッティの後ろにいた、紫色の髪の女がスカリエッティに声をかける。

スカリエッティ

「ああ、ウーノ。来ていたのか」

ウーノ

「捕獲対象が、また一つ増えてしましましたね」

スカリエッティ

「この次元には無い特異な存在。実に興味深いじゃないか」

ウーノ

「はあ……」

ウーノが呆れた顔をする。

？？？

「失礼する」

スカリエッティのラボに黒いタイツを着て、サングラスをかけた男  
が入室する。

ウーノ

「あなたは……」

入室して来た男を見たウーノが顔をしかめる。

スカリエッティ

「やあ、君か。何の用だい？」

？？？

「君の開発したデュエルロイドだが」

スカリエッティ

「どうかしたのかい？」

？？？

「我々のデータを組み込んだ事によって、君の造り出した『作品』  
に並ぶ力を得たよ」

スカリエッティ

「そうか。それは良かつた……」

？？？

「後はクアットロが最終調整をしてくれるはずだ。それには少し時間をするが……」

スカリエッティ

「そうか。その辺りは彼女に任せるとしよう。ところで……」

スカリエッティがモニターに視線を戻す。

？？？

「遊城十代、そして、Fの遺産か」

スカリエッティ

「ああ、どれも興味深い代物ばかりさ。」

？？？

「精霊の力を持つ遊城十代、禁断の方法で生まれた人形か」

スカリエッティ

「あの三人は最優先で捕獲したいものだ。できれば、生きている状態で」

スカリエッティが狡猾な表情を浮かべる。

？？？

「その件についてなのだが、今、遊城十代とFの遺産が街に出ている。捕獲するチャンスが巡って来たのかも知れん。その時は私も出

撃るつもりだがね」

スカリエッティ

「そうか！遊城十代の方は君に任せる。」あらからも、私の『作品』  
達を出撃させる」

？？？

「了解した」

そう言って黒の男は黒い霧となつて姿を消した。

ウーノ

「よろしいのですか？」

スカリエッティ

「何がだい？」

ウーノ

「あの様な得体の知れない者共に好き勝手やらせるなど……」

スカリエッティ

「構わないさ。利用できる者は全て利用する。今までもそつして來  
たじゃないか」

ウーノ

「……」

スカリエッティ

「さてウーノ。ルーテシアと動けるナンバーズをここに呼んでくれ  
ないかな？この機を逃す訳には行かないでね」

ウーノ

「わかりました」

ウーノはせきつとリラボから退室した。

2人は初めに衣服関係の店に行くことにした。

四六時中アカデミアの制服を着ているのはどうなのかという事で、十代に似合つ服を探そうという事で衣類店に立ち寄ったのだ。

フェイト

「うん、これなんかいいんじゃないかな?」

十代

「そうか?自分じゃよく分かんないけどな」

十代が着ているのは黒いTシャツの上に赤のジャケット、ズボンは黒いジーンズ、靴はアカデミアの物を履いている。

正直アカデミアの制服と色の配色は殆ど同じなのだが、卒業したのにずっと制服を着ているよりマシだろう。

十代

「よく見ると中々いいな。フェイト、サンキューな!」

“ひつやら隨分氣にいったようつである。

フュイト

「ひついたしまして」

その後、十代はフュイトの案内で街を回つた。

この世界に来てから連戦続きで疲れた顔をしていた十代の顔も隨分と穏やかになつていつた。

一通り街を回つた二人は公園のベンチで休憩していた。

十代

「ふう……」

フュイト

「疲れた？」

十代

「まあな、でも俺は楽しかつたぜ。サンキューな」

フュイト

「いいよそんなのー色々な所に引っ張り回しちゃって、迷惑じやなかつた？」

十代

「そんな事無こせ。」(うこうのあげえ久しづつだつたし、本当にありがとな)

フロイト

「(やうこえば、あの模擬戦からかな……十代を意識する様になつたのは。こつも自分をストレートにぶつけたる十代に惹かれて……)」

フロイトは十代と模擬戦をした時の事を思い出す。

十代

「どうした?」

十代と田が合ひてしまつたフロイトは顔を赤くする。

フロイト

「こ、こ、せ、何でもなこよ……。」

十代

「いや、お前顔が赤いば? 真合でも悪このか?」

フロイト

「(この純れわん無ければなあ……)」

フロイトは心の中で息をついた。

きっと今の十代に『せき合ひてくださいこー。』と言つても、『いいけど』(うど)と答えらるだらう。

フロイト

「(じやあ、せき合ひてくださいこじやなくて、愛してゐつて言えば

私の気持ちは云わるのかな? (

十代

「お、おい? フェイト? (何か黙つちまつたぞ? 僕なんかしたか?)

「

ユベル

『 (してるよ……) 』

ユベルは呆れていた。

フェイト

「ねえ、十代は……」

フェイトが真剣な眼差しを重大に向ける。

十代

「ん?」

フェイト

「十代は、私の事……」

と、フェイトがそう言いかけた時、キヤ口からの全体通信が入った。

フェイト

「これは、キヤ口からの全体通信? (ああ……いい所だったのに……)」

十代

「え?」

2人は心配しながら通信を聞く。

キヤロ

『これから、ライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します!』

キヤロが少しあわてた感じで報告をする。

キヤロ

『サードアベニューF23区画の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見』

その報告を聞き、真剣な表情になるが次の報告でさりに驚く。

キヤロ

『ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人……』

エリオ

『女の子は、意識不明です』

キヤロのあとにエリオが続けて言つ。

十代

「女の子?」

ユベル

「十代……」

十代の隣にユベルが現れる。

十代

「ん？」

ユベル

「嫌な予感がする。すぐに女の子の方へ向かった方がいい」

十代

「わかつた！フェイト！」

フェイト

「うんー。」からそつ遠くないよ。急げーー。」

十代

「ああ！行くぜ！！」

そして、現場へと向かう一人を後ろから見ている男がいた。

？？？

「十代君、街に来ていたのか……」

その男が天を仰ぐ。

？？？

「しかし、今は彼に会うときではない。今はこの街に迫っている新たな脅威と戦うときだ！！」

男はそう呟いて走り出した。

第1-6話 休日と新たなる脅威（後書き）

フェイト

「気になつてたんだけど、あの模擬戦つて何？」

ネロ

「まあ、その話は後日な……」

フェイト

「そつが、何にも考へないで書いたんだね？」

ネロ

「そんなことないさ（棒）」

フェイト

「……」

フェイト達の模擬戦の話は後日書きます。

本當です。

## 第17話 迫り来る敵！希望のHEROネオス！！

十代とフェイトが、キャロから送られてきた通信場所に着くと既にスバル、ティアナが来ていた。

状況を確認したところケースはもう一つあるらしい。

話しているとなれば、シャマル、リインもヴァイスのヘリで来た。

十代 「シャマル、その子は大丈夫なのか？」

シャマル

「バイタルは安定してるし、危険な反応もない。……心配ないわ」

十代達はそれを聞くととりあえず安心した。

なのは

「とにかく、この子とケースはこのままヘリで搬送するから、皆はこっちの調査をお願い」

フォワード陣

「――はい！」

フォワード陣が元気良く答える。

シャマル

「あと、十代君。」

「れ」

シャルマルがヘリから十代のデュエルディスクを持って来て十代に渡す。

十代

「助かつたぜ。これが無いと、俺は戦えないからな」

十代がデュエルディスクを腕に装着する。

そして、レリックを狙いガジェットが地下水路と海上に現れた。

地下のほうは十代とフォワードの四人にまかせ、ヴィータとリインは海上の南西方向の敵を、なのは、フェイトの2人は北西方向の海上の敵をそれぞれ倒すこととなつたのだが、

ユベル

「十代、何か不穏な気配を感じる。気をつけろ」

十代

「ああ。わかってる！」

十代はフォワードメンバーと共に地下水路へと飛び降りた。

地下下水道を走り、向かってくるガジェットを破壊しながら、ティアナはスバルの姉、ギンガ・ナカジマと連絡を取つていた。

十代

「お前の姉ちゃんのギンガって人も魔導師なのか？」

スバル

「はい！私のシユーティングアーツの師匠で歳も階級も一つ上なんです！」

十代が聞くとスバルは誇らしく言った。

十代

「そいつは楽しみだ。一度戦つてみたいぜ！」

ユベル

「そんな事言つてる場合か！来るぞ！」

前方からガジェットが数機向かって来るのが見えた。

十代

「面倒だな……一撃で終わらせてやるぜ……融合召喚！来い！『E・HERO ワイルドジャギーマン』……」

十代の目の前にワイルドジャギーマンが現れる。

十代

「行け！ワイルドジャギーマン！……」

十代が指示を出すとワイルドジャギーマンは自身の身の丈以上の大剣を軽々と振り回し、ガジェットを全滅させる。

エリオ

「す……す……」

キヤロ

「アレだけのガジェットを一瞬で……」

エリオとキヤロが驚く。

ティアナ

「ガジェットを一瞬で撃破したのは、その召喚獣のスキルですか？」

と、ティアナが質問する。

十代

「さすがティアナだな。そう、『ワイルドジャギーマン』には相手に一度ずつ攻撃できる効果がある。俺のデッキのモンスターは基本的に一回しか攻撃できなから、集団で攻撃されると結構厄介だが、こいつなら集団で現れる敵にも対応出来るつて訳さ」

スバル

「でもそれって十代さんが手に持つてる召喚獣を呼ぶカードがうまく揃わないと召喚できないんですよね？」

十代

「ん？ ああ、まあな」

と、十代が言いかけたとき、壁が派手に破壊され、十代達は構える。

十代

「ガジェットか！？」

スバル

「いえ、この魔力の感じ……ギン姉！」

土煙の中から、藍色の長髪を靡かせて、左手に白色のリボルバー・ナックル、両足にブリツツキャリバーを装着したギンガ・ナカジマが姿を現す。

ギンガ

「久しぶりね、スバル！」

スバル

「うん！ギン姉！」

スバルは嬉しそうにギンガに駆け寄る。

十代

「何か、すげえインパクトのある登場だな」

ユベル

「それより、局員が壁を破壊してよかつたのか？」

十代とユベルがそれぞれの感想を述べる。

ギンガ

「えっと、スバル。こちらの方は？」

スバル

「えっとね……」

スバルが答えるより先に十代が自己紹介をする。

十代

「俺は遊城十代。別の世界からこの世界に飛ばされて来た。それで機動六課に協力してる」

ユベル

「僕の名はユベル。十代の魂に宿る精靈を」

二人が自己紹介を終える。

ギンガ

「ああ、はい」

十代とギンガが握手をする。

そして、共にレリック搜索に乗り出す。

しばらくすると、柱が何本もある広い場所にたどり着き、レリックの入ったケースが見つかった。

すると突然、高速で何かが接近し、レリックを持つキャラに襲いかかる。

エリオ

「キャラ！危ない！」

キャラ

「えつ？」

エリオがストラーダで攻撃を弾き返す。

エリオ

「へっ……」

そして、キャロの後ろに紫色の髪をした少女が砲撃魔法を撃とうとする。

十代 「くっ…『フュザーマン』…」

十代がフュザーマンを召喚する。

召喚されたフュザーマンは背中の翼の羽を飛ばし、少女に攻撃し、砲撃体勢を解除させる。

十代

「エリオ! キャロを連れて、ティアナと一緒にいる!」

十代がエリオに声をかける。

エリオ

「はい! キャロ、行け!」

キャロ

「う、うん!」

エリオがキャロの手を引いてティアナ達と合流するべく移動する。

ゴベル

「あの小娘とは別に何かが高速移動している。姿も消している。この状況で攻撃するのは難しい」

ユベルが状況を分析する。

十代

「なら、『フェザーマン』！お前の力を借りるぜ！』『フェザーマン』  
を生け贋に『ネクロダークマン』召喚！」

十代がネクロダークマンを召喚する。

十代

「行け！『ネクロダークマン』！」

十代が指示を出すと、ネクロダークマンは姿を消す。

その直後、十代の目の前に黒い鎧を身に纏つた戦士、少女の召喚獣  
ガリューが現れ、両腕の爪で十代に攻撃する。

十代

「くっ！？」

十代はその攻撃を左腕の『テュエルディスク』でガードする。

十代

「『ネクロダークマン』！！」

十代の声に反応してネクロダークマンが、黒い戦士の背後に現れ、  
黒い戦士を羽交い締めにする。

十代

「モンスターで攻撃すれば、その使い手を狙つて来る事は読めてた  
ぜ。だから、こういう手を打たせてもらつたぜ」

黒い戦士はネクロダーコマンの拘束を逃れ、少女の隣へと移動する。

ユベル

「どうやら、あの黒い戦士はあの小娘が召喚したみたいだね。あの戦士から小娘の魔力を感じるからね」

十代

「あの黒い奴は接近戦に強いな。ティアナ、どうする?」

十代はティアナに指示を仰ぐ。

ティアナ

「スバル！私が援護するからギンガさんと二人での黒い奴をお願い！エリオは十代さんと一緒にあの女の子を！キヤロはフリードと一緒にエリオ達を援護して！」

ティアナがすぐに指示を出す。

?

「残念だがそううまく行かねえよーー！」

大きな声が響くと、少女の隣にリインと同じ背丈の赤髪の少女が現れる。

少女  
「アギト……」

?

「来たぜ、ルールー！」

アギトと呼ばれた少女は両手から炎を出す。

アギト

「喰らえ！！」

炎弾を連続発射する。

十代

「くつ！『バブルマン』！」

十代がバブルマンを召喚する。

召喚されたバブルマンは右腕の銃から水流を発射し、アギトの放った炎弾を消し止めるが、その隙にバブルマンの背後に回った黒い戦士の連続攻撃によつてバブルマン、そしてネクロダークマンは破壊された。

十代

「ぐああつーー！」

ユベル

「十代、奴らの攻撃を受け流して、あいつ等と合流しーー！」

十代

「わかってるよーー！」

少女の魔法、アギトによる炎の連続攻撃、黒い戦士の近接格闘が組み合わされた連携攻撃を繰り出され、あつと言ひ間に十代達を追い詰める。

スバル

「マズい！追い詰められた！」

十代

「いや、そうでもないぜ！」

十代がスバルの言葉を否定する。

スバル

「え？」

十代

「奴らの攻撃で、俺等はうまく一つに固まる事が出来た。これなら、誰が狙われようと助けられる！」

ユベル

「そうじゅうと言つたのは僕だけね……」

十代

「行くぜ！墓地のネクロダークマンの効果で一度だけ、『E・HERO』を生け贋無しで召喚できる！来い！『E・HERO ネオス』！」

十代の場に、ネオスが現れる。

スバル

「これが十代さんの最強の召喚獣……」

エリオ

「カツ『いいです！』」

十代

「まだまだ！ネオスの力はこんなものじゃないぜ！装備魔法『ネオス・フォース』を『ネオス』に装備！」

ネオスの身体がオレンジ色に発光する。

十代

「行け！『ネオス』！『ラス・オブ・ネオス』！」

ネオスが少女に向かつて突進するが、それを見た黒い戦士がすぐに少女の前へと移動し、ネオスの攻撃を防ぐ。

しかし、ネオスの攻撃があまりにも強かつたのか、黒い戦士はその攻撃を受け切る事が出来ずに吹っ飛ばされる。

少女

「ガリュー！アギト、お願ひ」

アギト

「おうつー！」

アギトは自身が出せる最大級の炎弾を発射して、辺りに煙を撒き散らす。

十代

「くそつ！煙幕か！」

ユベル

「逃走のための攻撃だ。下手に手を出さなければ大丈夫だ」

ヴィータ

「お前ら！大丈夫か！」

そこに、急いでやつて来たヴィータとリインが合流する。

煙が晴れると少女達の姿がなかつた。

十代

「やつぱり逃げられたか！……ん？」

天井が崩れる音が鳴り、瓦礫が落ちてくる。

ヴィータ

「スバル！」

スバル

「はい！ウイングロード……！」

スバルが螺旋状に作られた魔力製の道を展開する。

全員がウイングロードを登り、地上に戻る。

十代

「つたく、とんだ休日だぜ……ん？」

遠くのほうに黒い影が登つていいくのが見えた。

十代

「（あの髪、まさか……）」

第17話 迫り来る敵！希望のHEROネオス！！（後書き）

次回はデュエルシーンを書くつもりです！！

第1-8話　十代▽S闇と光の天使達！！（前書き）

9／29に最後の△テュエルシーンを一部変更しました。

## 第18話 十代VS闇と光の天使達！！

地上へ空間転移魔法で退避した少女は傷ついた自分の召喚獣を帰還させ、巨大な甲虫の姿をした新たな召喚獣、地雷王を召喚し、十代達のいる地下下水道を崩壊させようとしていた。

だが、その直後、地雷王にキャロの放った桃色のバインドが現れ、地雷王は動きを封じられた。

さらに一本のウイングロードが交差するように出現し、スバルとギンガが現れる。

そしてヴィータが空を飛翔し、ティアナが魔力弾で少女を狙い、最後にエリオが首もとにストラーダの刃を突き立てる。

アギトもリインに捕まり、特に何もすることがなかつた十代とユベルは見事なチームワークに感心していた。

ユベル

「彼女達も随分と成長したな」

十代

「ああ。俺ら、必要なかつたかもな」

ユベル

「彼女たちは以前より確実に強くなつてゐるからね。君もウカウカしてると、すぐに追い抜かれるよ」

十代

「ちえ……ん？」

ヴィータ達に合流しようとした十代は突然の違和感に襲われる。

十代

「（何だ……？）の感覚は……？」

十代が空を見上げると、先程保護した少女を乗せて飛び立ったヘリが空を飛んでいる。

十代

「まさか！？」

十代が危険を感じると同時に、廃ビルに2人の女性が居た。一人は眼鏡をかけ、白いマントを羽織った女。もう一人の女は布に巻かれた棒らしきものを持っていた。

眼鏡の女

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

眼鏡をかけている女が布に包まれた巨大な棒の様な物を持っている女に話しかける。

ディエチ

「ああ。遮断物もないし空気も澄んでるからよく見える」

「ディエチと呼ばれた女が言つたとおり、彼女の眼には空中に浮いているヘリが映つていた。

ディエチ

「でもいいのか？クラットロ。撃つちやつて。ケースは残せるだらうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになるかも」

クラットロ

「ウフフフ……ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に『聖王の器』なら砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ」

クラットロの話を聞き終えると、ディエチは大砲を包んでる布を取つて大砲『イノーメスカノン』を露わにする。

そしてイノーメスカノンを両手でしつかり構えチャージを開始する。

ディエチ

「後12、11、10……」

狙いは機動六課のヘリだった。

十代達にも、空で戦闘しているはやて達にも高エネルギー反応があるという通信は入つていた。

十代

「あのエネルギー反応が巨大なビームだつたら、狙いは俺達か？それとも空中で戦つてゐるのは達か！？」

ユベル

「いや、ここには捕らえた奴らもいる。あのエネルギー反応の正体がこいつ等の仲間なら、ここに撃つ事は無いだひつ」

ヴィータ

「それじゃあ、狙いはなのは達の方か！？」

ユベル

「それも多分違うな。あそこから撃つても、確実に避けられ、自分達の戦力を無駄に消費して終わる。おそれらく狙いは……」

ユベルがシャマル達の乗るヘリのほうへと視線を向ける。

十代

「まさか……狙いは……」

フェイト

『狙いがヘリだとしたら、距離が離れ過ぎてる所為で、最速で向かつたとしても、間に合わない……』

フェイトから通信が入る。

十代

『防御用のカードは何枚があるが、この距離からじや、手が出せねえ……』

十代達は黙つてヘリを見ているしか無かつた。

ディエチ

「発射！！」

ディエチはイノーメスカノンの引き金を引き、Sランク級の破壊力のを持つ砲撃を放った。

標的は保護した少女を乗せたヘリ。

ヘリを破壊し、少女を連れて退散するという算段だった。

十代

「やつぱり、狙いはヘリか！？」

十代達全員が気付いた時には砲撃はヘリに向かっていた。

おそらく避ける事も出来ないだろう。

全員が諦めかけた時、ヘリの前に黒い穴が現れる。

砲撃はヘリには当たらず、そのまま黒い穴へと吸収された。

十代

「なつ……なんだアレはー!？」

十代達が驚愕する。

驚いていたのは十代達だけではなかつた。

砲撃を放つたディエチと指示を出したクワットロも同じである。

クワットロ

「ちょ……ちょっと、どういう事!?!？」

ディエチ

「私に聞かれても……」

クワットロとディエチは驚きを隠せなかつた。

その直後、金色の魔力弾が2人を襲い、フェイトが2人の後ろに回り込む。

フェイト

「見つけた」

クワットロ

「「」ちも?」

ディエチ

「早い！」

二人は逃げ、フェイトが追いかけるが、クワットロの能力で2人は姿を隠す。

しかし、はやてが広域空間攻撃魔法を展開していた。

フェイトは一度上空に退避して巻き込まれないようにする。

はやて

「闇に染まれ……ディアボリック・ミニッシュョン！！」

紫色の球体が巨大化していき、辺り一面を呑み込んだ。

姿を隠した二人は何とか避けたが、なのはとフェイトが2方向からの砲撃魔法で狙っていた。

フェイト

「トライデントスマッシュヤー！！」

なのは

「エクセリオンバスター！！」

なのはとフェイトが砲撃が発射する直後に突然、なのはとフェイト、はやての3人の姿が消えた。

消えた砲撃を見て驚いていた十代達の周りにも脅威が迫っていた。

十代達の周りに黒い霧が出現したのだ。

ユベル

「これは……」

十代

「ああ、地下で見たのと同じだ」

十代がデュエルディスクを構え、黒い霧を見たヴィータ達も警戒する。

黒い霧は一ヶ所に集まり、男の姿になる。

？？？

「ほう、暗闇の中とはいって、私の気配を察知していたとは、さすがは遊城十代だな」

十代

「お前は、ミスター！！」

ミスターと呼ばれた男は黒いタイツの様な衣装に身を包み、サングラスを掛けていた。

ヴィータ

「何だこいつ！？」

リイン

「黒い霧が人の形になつたです！？」

その異形の姿にヴィータ達が引く。

ミスターＴ

「私の目的は遊城十代、君だ」

十代

「何！？」

ミスターＴ

「君のその力は強力だ。是非、我々に協力する気は無いか？」

十代

「ふざけるな！誰がお前達に協力なんかするか！」

ミスターＴ

「ふうん。予想通りの返答だな」

ミスターＴが不適な笑みを浮かべる。

十代

「今回の事件はお前の仕業だな？一体、何が目的だ！」

ミスターＴ

「その質問に答えるつもりは無い」

ミスターＴは捕らえられているルーテシアの背後に黒い穴を開ける。

ミスターＴ

「君のお仲間が近くまで着ている。安全な所まで送つてやるから、保護してもらうんだな」

ルーテシア

「うん。ありがとう、助けてくれて」

ルーテシアはその穴に入り、姿を消す。

それを見届けたミスターTが十代達に視線を戻す。

ミスターT

「随分と簡単に行かせてくれたじゃないか。いや、簡単に行かせざるをえないと言つたほうがいいかな?」

ミスターTが笑う。

十代

「これは!?」

いつの間にか十代達の周りに黒い結界の様な物が存在していた。

ミスターT

「魔力が結合できないだろう?この結界は『アンチマギリンクフィールド』、通称AMFに似た力を有している。最も、別の世界から来た君に効果はないようだがね……」

十代

「つまり、この結界の中で戦えるのは、俺だけって事だな?」

十代がデュエルディスクを構える。

ミスター・T

「理解が早くて助かる。君は何としても連れて帰る」

ミスター・Tの左腕がデュエルディスクの様な形に変わる。

ミスター・T

「それと、ギャラリーをもう少し増やさうじよつ」

十代

「何?」

ミスター・Tが右手をルーテシア達のいた場所に向けると、なのは、フェイト、はやての3人が現れる。

十代

「なつ!?」

なのは達の突然の出現に十代達が驚く。

なのは

「あれ?」  
「は?」

フェイト

「私達、空で戦つたはずなのに……」

はやて

「どうして……つて何で十代君達がここにあるん?」

十代

「それはこっちが聞きたいぜ……どうして……まさかお前の仕業か！」

十代がミスターTを睨む。

ミスターT

「ふうん、その通りだ。彼女達をここへ移動させたのはこの私だ。ギャラリーが多いと中々楽しいだらう。それと、君を倒した後に、彼女達を始末するのも楽になるからね」

フェイト

「あなたは……！？」

ミスターT

「これは失礼。私とした事が自己紹介がまだだつたな。私の名はトウルーマン。ミスターTとでも呼んでもらおうか」

ミスターTが笑う。

なのは

「くっ！」

なのはがレイジングハートを構え、ミスターTを攻撃しようとするが、すぐに自分の身体の異変に気付く。

なのは

「魔力が、結合できない……！？」

ミスターT

「ここの中では魔力を結合させる事は出来ない。つまり、ここ

では君達は無力な人間だと言つ事だ

なのは

「そんな……」

十代

「なのは、お前達は下がつてろ。ここは俺に任せろ。」

なのは

「十代……」

十代

「心配すんな。俺はこんな所で負けたりしねえよ

と、十代が笑う。

なのは

「うん、そうだね！でも、油断は禁物だよ！」

十代

「おう！」

十代が構えるのと同時に、なのは達もヴィータ達と合流する。合流したなのは達を護る様にコベルがなのは達の前に移動する。

「ツベコベ言わずに、さっさと始めろよ  
「準備は整つたのかな？」

十代

「ツベコベ言わずに、さっさと始めろよ

お互いに『デュエル』ディスクを構える。

十代 & ミスター T

「『デュエル！！』」

十代 LP4000

ミスター T LP4000

十代

「先攻は貰うぜー！ドローーー！」

十代がドローカードを確認する。

ドローカードは『融合』。

十代

「『E・HERO クレイマン』を守備表示で召喚ー！」

十代の場にクレイマンが現れ、防衛体制をとる。

E・HERO クレイマン 守備力2000

十代

「さりに、カードを一枚伏せ、ターンエンド」

ミスター T

「私のターン、ドロー。私は手札から永続魔法『神の居城—ヴァルハラ』を発動！」

ミスターTの背後が美しい装飾で飾られた协会の様な物が出現する。

十代

「『ヴァルハラ』…？」

ミスターT

「このカードは自分の場にモンスターがない時、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚できる。私はレベル8の『堕天使アスモディウス』を特殊召喚！」

ミスターTの場に黒い衣装に身を包んだ天使が現れる。

堕天使アスモディウス 攻撃力3000

ミスターT

「『アスモディウス』の効果により、1ターンに一度、デッキから天使族モンスターを墓地に送る事が出来る。私は『デッキから『堕天使スペルビア』を墓地に送る。そして、手札から『ウィクトーリア』を攻撃表示で通常召喚！』

ミスターTの場に2体の竜を従えた天使が現れる。

ウィクトーリア 攻撃力1800

ミスターT

「バトル！『アスモディウス』で『クレイマン』を攻撃！」

アスモディウスが右手から黒い光球を出現させ、クレイマンへと投げつける。

黒い光球が直撃したクレイマンは爆散する。

十代

「くそっ！トラップ発動！』ヒーロー・シグナル！モンスターがバトルで破壊された時、手札、またはデッキからレベル4以下の『E・HERO』一体を特殊召喚できる！来い！『バブルマン』！」

十代の場にバブルマンが現れる。

E・HERO バブルマン 守備力1200

十代

「『バブルマン』の効果発動！召喚に成功した時、自分の場に他のカードが無い時、デッキから2枚ドロー！」

ミスターT

「だが、私の場にはまだモンスターが残っている。『ウイクトーリア』で『バブルマン』を攻撃！」

ウイクトーリアの従えている2体の竜がバブルマンを食い殺す。

ミスターT  
「ターンエンド」

十代

「俺のターン、ドロー！手札から、『融合』発動！手札の『フェザーマン』、『バーストレスティ』を融合！」

十代の場に青い渦が現れ、フェザーマンとバーストレディが渦に吸

い込まれる。

十代

「来い！マイフェイバリットカードー！』E・HERO フレイム・ウイニングマン』！…』

E・HERO フレイム・ウイニングマン 攻撃力2100

十代

「行くぜー！』フレイム・ウイニングマン』で『ウイクトーリア』を攻撃！』フレイムシート』！…』

フレイム・ウイニングマンが右手の竜から炎を発射し、ウイクトーリアを攻撃する。

ミスターT

「くつ……

ミスターT LP4000 - 300 = 3700

十代

「さらに、『フレイム・ウイニングマン』のモンスター効果により、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！』

スバル

「『ウイクトーリア』の攻撃力は1800だから……』

ティアナ

「1800ポイント、あの黒タイツのライフを削れる！』

ミスター

「……」

フレイム・ウイングマンの攻撃はウイクトーリアを貫通し、ミスターにもダメージを『える。

ミスター LRP3700-1800=1900

炎を直撃を受けたミスターの上半身は黒い霧へと変化し、炎が消えると同時にもとに戻った。

十代

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド

ミスター

「私のターン！『アスモディウス』で『フレイム・ウイングマン』を攻撃！」

アスモディウスが攻撃体勢に入る。

十代

「この瞬間、トラップ発動！『ヒーロー・バリア』！俺の場に『E・HERO』が存在する時、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

ミスター

「……カードを1枚伏せ、ターンエンド」

十代

「ドロー！（俺の引いたカードは『摩天楼・スカイスクレイパー』。）  
こいつで『フレイム・ウイングマン』の攻撃力を上げて、『アスモ  
ディウス』を破壊して、『フレイム・ウイングマン』の効果ダメー  
ジで勝てる……だが、あの伏せカードがモンスター破壊カードだつ  
たら俺は不利になる。ならまずは……）行くぜ！『E・HERO  
スパークマン』を攻撃表示で召喚！」

『E・HERO スパークマン 攻撃力1600

ミスター・T

「この瞬間！トラップ発動！」

十代

「ツー？」

ミスター・T

「『激流葬』！モンスターが召喚された時、フィールドの全モンス  
ターを破壊する」

ミスター・Tのカードから、大量の水が出現し、フィールド上のモン  
スターを飲み込む。

水が消えると同時に十代とミスター・Tのモンスターも消滅していた。

十代

「トラップ発動！『エレメンタル・ミラージュ』！自分の場の『E・  
HERO』が効果によって破壊された時、その『E・HERO』を  
破壊される前の状態で場に戻す！」

十代の場にフレイム・ウイングマンとスパークマンが戻る。

エリオ

「十代さんの召喚獣が元に戻つて、あいつの場には召喚獣がいない！」

リイン

「2体の召喚獣で攻撃すれば勝てるですう！…」

エリオとリインが歓喜の声を上げる。

ミスター・T

「喜ぶのはまだ早い。『墮天使アスマティウス』が破壊され、墓地送りになつた事で効果発動！私の場に『アスマトーケン』、『ディウストーケン』を守備表示で特殊召喚！」

ミスター・Tの場に赤と青のアスマティウスが現れる。

アスマトーケン 守備力1300

ディウストーケン 守備力1200

ミスター・T

「『アスマトーケン』は効果では破壊されず、『ディウストーケン』は戦闘では破壊されない。さて、どうする？」

十代

「（『ディウストーケン』は戦闘では破壊されない……なら）『フレイム・ウイングマン』で『アスマトーケン』を攻撃！」

フレイム・ウイングマンが右手から炎を発射し、戦闘耐性の無いアス

モトーケンを焼き殺す。

ミスター・T

「だが、『フレイム・ウイングマン』の効果は戦闘で破壊したモンスターを墓地に送らなければならぬ」

十代

「ターンエンド」

ミスター・T

「私のターン、ドロー。まずは『神聖なる球体』を守備表示で召喚」

神聖なる球体 守備力500

ミスター・T

「そして、手札から魔法カード『シールド・クラッシュ』を発動。このカードは場に表側守備表示で存在するモンスターを破壊する。この効果で破壊するのは『神聖なる球体』」

ミスター・Tの場の神聖なる球体が破壊される。

ティアナ

「自分の場の召喚獣を犠牲にするなんて……」

ミスター・T

「常識に捕われるのが私のデュエルでね。これで私の墓地には天使族モンスターが4体。よつて、手札からこのモンスター『大天使クリスティア』を攻撃表示で特殊召喚!」

ミスター・Tの場に4つの光が集まり、美しい天使の姿となる。

大天使クリスティア 攻撃力2800

十代

「『クリスティア』だと……！？」

ミスターT

「十代。正しき闇の力をこの聖なる光で消し飛ばしてやるつ……！」

第1-8話　十代ＶＳ闇と光の天使達！！（後書き）

次回で決着、その次の話で模擬戦の話をやめつと思います。

## 第19話 逆転のコンタクト融合!!

十代 L P 4 0 0 0 0 ミスター T L P 1 9 0 0

ミスター T

「『大天使クリスティア』がこの召喚方法で召喚された時、墓地の天使族モンスターを手札に加える。私が手札に加えるのは『ウイクトーリア』」

十代

「くつ！？」

ミスター T

「そして、手札に加えた『ウイクトーリア』を攻撃表示で召喚！」

ウイクトーリア 攻撃力1800

ミスター T

「『大天使クリスティア』で『フレイム・ウイングマン』を攻撃！」

！」

クリスティアが両手を天に掲げると、天から光の矢が振り注ぎ、フレイム・ウイングマンを貫く。

大量の矢が刺さったフレイム・ウイングマンは破壊される。

十代

「『フレイム・ウイングマン』……！」

十代 LP40000 - 700 = 3300

ミスターT

「『ウイクトーリア』で『スパークマン』を攻撃！」

ウイクトーリアの従えた2体の竜がスパークマンを食い殺す。

十代 LP3300 - 200 = 3100

ミスターT

「私はこれでターンエンド」

ユベル

「一気に形勢逆転か……しかも、あのモンスターがいる限り、十代は特殊召喚が出来ない」

フェイト

「それって……」

ユベル

「十代のデッキは融合によつてレベルの低いモンスターを素材にレベルの高いモンスターを呼ぶのが基本戦術。だが……」

なのは

「それが出来ないと、十代の召喚獣は攻撃力の低い召喚獣だけになる……」

十代

「俺のターン！（くつ……俺の引いたカードは『N・グラン・モール』。『グラン・モール』バトルした相手モンスターを手札に戻す

強力なカード。奴の場には攻撃力2800の『クリステイア』と攻撃力1800の『ウイクトーリア』。ここで『グラント・モール』を使ってどちらかのモンスターを手札に戻した所で、俺の場はガラ空き……。次の奴のターンにダイレクトアタックを決められてしまう……。なら……俺は手札から、魔法カード『コンバート・コンタクト』を発動！自分の場にモンスターがない時、手札の『グラント・モール』とデッキの『フレア・スカラベ』を墓地に送り、シャツフル。その後、カードを2枚ドロー！カードを2枚伏せ、ターンエンド

はやて

「召喚獣を召喚しない？」

フェイト

「召喚獣のカード、引けなかつたつて事！？」

ユベル

「この状況でモンスターを1枚も出せないとはな……」

ミスターT

「私のターン。君の場にモンスターは0。だが私の場には攻撃力2800の『クリステイア』と攻撃力1800の『ウイクトーリア』がいる。この2体の攻撃で君のライフは死きてる」

十代

「くっ！」

ミスターT

「さらばだ！遊城十代！『クリステイア』でダイレクトアタック！」

クリスティアが両手を天に掲げると、天から無数の光の矢が十代に振り注ぐ。

十代

「トラップ発動！『聖なるバリア・ミラーフォース』！相手が攻撃して来た時、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊するぜ！！」

クリスティアの攻撃が十代の目の前に現れた半透明のバリアによって反射され、クリスティアとヴィクトーリアを破壊する。

ミスター・T

「くつ！？」

十代

「迂闊な攻撃だつたな！！」

ミスター・T

「『クリスティア』は自身の効果で私の『デッキ』の一番上に戻る。そして私は手札より魔法カード『トレード・イン』を発動。手札の『堕天使ゼラート』を墓地に送り、『デッキ』より2枚ドロー。さらに『神の居城・ヴァルハラ・』の効果発動！自分の場にモンスターがない時、手札の天使族モンスター一体を特殊召喚できる。よつて私は再び『大天使クリスティア』を特殊召喚」

大天使クリスティア 攻撃力2800

十代

「また『クリスティア』が……！？」

ミスター・T

「ターンエンド」

十代

「ドロー！ 魔法カード『テイク・オーバー・ファイブ』！『テッキの上からカードを5枚墓地に送る』

墓地に送ったカードは『E・HERO ワイルドマン』、『ネクロ・ガードナー』、『E・HERO ネクロ・ダークマン』、『N アクア・ドルفين』、『異次元トンネル・ミラーゲート』。

十代

「さらに魔法カード『融合回収』を発動！ 自分の墓地から、『融合』と融合に使用したモンスター一体を手札に戻す」

十代は『融合』と『E・HERO バーストレディ』を手札に戻す。

十代

「そして俺は『バーストレディ』を守備表示で召喚！ ターンエンド

ミスター・T

「私のターン。魔法カード『禁じられた聖杯』。このターンのエンドフェイズまで自分の場のモンスター一体の攻撃力を400ポイントアップさせ、効果を無効にする」

大天使クリスティア 攻撃力 $2800 + 400 = 3200$

十代

「何！？ まさか！？」

ミスター・T

「そのまさかだよ。『クリスティア』の効果が無効にされた今、モンスターの特殊召喚が可能になる。手札より魔法カード『死者蘇生』を発動！これにより、墓地のモンスター一体を特殊召喚！蘇れ！『墮天使スペルビア』！！」

ミスター・Tの場に赤い翼を生やした壺の様な姿の天使が現れる。

墮天使スペルビア 攻撃力2900

ミスター・T

「『スペルビア』が墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地の『スペルビア』以外の天使族モンスターを特殊召喚できる！出でよ！『墮天使ゼラート』！」

ミスター・Tの場に紅い翼の天使が銀色の剣を携えて現れる。

墮天使ゼラート 攻撃力2800

ミスター・T

「バトルだ！『クリスティア』で『バーストレディ』を攻撃！」

クリスティアが天空から光の矢をバーストレディに向けて発射する。

十代

「そう簡単にやられるかよ！トラップ発動！『攻撃の無力化』！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する…！」

クリスティアの攻撃はバーストレディには届かず、バーストレディの前に現れた時空の渦に吸収された。

ミスター・T

「思つたよりしづといな。私はこれでターンエンド」

大天使クリスティア 攻撃力3200 - 400 = 2800

十代

「ドロー！（くそつ！）のカードじゃ、今の状況を変えられない……。）ターンエンド」

ミスター・T

「私のターン。先程の罠カードも無駄になつてしまつたようだな。それでは戦いの幕を降ろすとしよう。まずは『クリスティア』で『バーストレディ』を攻撃！」

クリスティアが天空から降らせた矢でバーストレディを串刺しにする

ミスター・T

「続けて『墮天使ゼラート』でダイレクトアタック！」

墮天使ゼラートがミスター・Tの場から十代の目の前へと移動し、手にした剣で十代を斬る。

十代

「ぐあああああつー！」

斬られた衝撃で十代が膝を付く。

十代 LP - 3100 - 2800 = 300

十代

「うう……」

なのは

「十代……」

ヴィータ

「おい！大丈夫かよ！……」

ユベル

「一気にライフを減らされたか……」

フェイト

「それに、あいつはまだ攻撃していない召喚獣がいる……」

はやて

「それが通れば十代は……」

ミスターT

「そう、敗北だ。彼もここまでよく頑張ったが、ここまでかな？彼の場にモンスターはいない。だが私の場にはまだ攻撃していない『スペルビア』がいる」

六課メンバーが身構える。

ミスターT

「そう怖がる事は無い。彼を葬った後に君達もすぐに始末してやる……。『Fの遺産』の2人は別だが……」

エリオ

「え……？」

フュイト

「何故、その事を……」

ミスターT

「その質問に答えるつもつは無い。滅び往く君達に答えるつもつも無いがな……」

フュイト

「へつ……！」

ミスターT

「さて、まずは田の前にいる男に止めを刺すとしよう。『墮天使スペルビア』でダイレクトアタック！！」

スペルビアが十代に向けて黒い雷球を発射する。

なのは

「ああつ……！」

フュイト

「十代……！」

六課メンバーが十代の敗北を覚悟するが、スペルビアの攻撃は、十代の目の前に現れた赤と黒の鎧を着た戦士によつて阻まれる。

ミスターT

「何……？」

ユベル

「『ネクロ・ガードナー』か……」

ユベルが笑う。

十代

「墓地の『ネクロ・ガードナー』は墓地から除外する事で相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする……」

膝を付いていた十代が立ち上がる。

ミスターT

「仕留め損なったか……。ターンエンド」

十代

「俺のターン。（このドローに全てを掛ける！）ドロー！ 魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』！ 自分の墓地から『E・HERO』と名の付いたモンスターを5枚選択してデッキに戻してシャッフルする」

十代は『フェザーマン』、『バーストレディ』、『クレイマン』、『スパークマン』、『バブルマン』をデッキに戻してシャッフルする。

十代

「その後、カードを2枚ドロー……！」

十代がカードを2枚ドローする。

十代

「『ネクロ・ダークマン』は墓地に存在する時、一度だけ、『E・HERO』と名の付いたモンスターを生け贋無しで召喚できる。現れる！『E・HERO ネオス』！！」

十代の場にネオスが現れる。

E・HERO ネオス 攻撃力2500

ミスターT

「ようやくお出ましか……。だが『ネオス』の攻撃力では私の天使達の攻撃力には遠く及ばない」

十代

「慌てるな。勝負はこれからだ。フィールド魔法『スカイスクレイパー』発動！！」

十代がカードを『デュエルディスク』にセットすると、十代達の周りの景色が夜の高層ビル街へと変わる。

ミスターT

「これは……！？」

十代

「このフィールドこそ、ヒーローが活躍する舞台だ！『スカイスクレイパー』は『E・HERO』と名の付いたモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、その攻撃モンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

ミスター・T

「何!?」

十代

「行くぜ!『ネオス』で『クリスティア』に攻撃!『スカイスクレイパー』の効果で攻撃力アップ!!」

E・HERO ネオス 攻撃力 $2500 + 1000 = 3500$

ネオスがクリスティアに向かって突進する。

それを見たクリスティアがその攻撃を阻止しようと天空から無数の光の矢をネオスに向けて発射する。

しかし、『スカイスクレイパー』の能力で攻撃力が上がったネオスはその攻撃を軽々と避け、クリスティアの胴体にパンチを入れる。その攻撃を受けたクリスティアは爆散する。

ミスター・T

「くつ!!」

ミスター・T LP 1900 - 700 = 1200

十代

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ミスター・T

「私のターン!例え『クリスティア』が破壊されようと、私の場にはまだ『スペルビア』と『ゼラート』がいる。このターンで君を葬

る！行け！『スペルビア』！『ネオス』攻撃！！』

スペルビアが黒い雷球をネオスに向けて発射する。

十代

「残念だが、それは叶わないぜ！トラップ発動！『魂の結束・ソウル・ユニオン』！！このターン、攻撃表示のモンスターの1体の攻撃力は自分の墓地から選択した「E・HERO」と名のつくモンスター1体の攻撃力分アップする。俺が選ぶのは『フレイム・ウイングマン』！！よつて、『ネオス』の攻撃力は『フレイム・ウイングマン』の攻撃力分アップする！！」

E・HERO ネオス 攻撃力 $2500+2100=4600$

ミスターT

「攻撃力4600だと！？」

十代

「これで、『スペルビア』の攻撃力を上回つたぜ！このバトルが成立すれば俺の勝ちだ！迎撃しろ！『ネオス』！！」

スペルビアが発射した黒い雷球をネオスが受け止め、そのままスペルビアへと投げ返す。

ミスターT

「手札より速攻魔法『エンジェル・リカバリ』を発動！自分の場の天使族モンスター1体につき500ポイントライフを回復する！」

攻撃を受けたスペルビアは破壊される。

ミスター　ＬＰ2200・1700＝500

ミスター

「『スペルビア』も破壊されたか……。ならば、『墮天使ゼラート』の効果発動！手札から闇属性モンスター『墮天使アスマティウス』を墓地に送り、相手の場のモンスターを全て破壊する！」

ゼラートが手にした剣から衝撃波を飛ばし、ネオスを破壊する。

十代

「『ネオス』！？」

ミスター

「カードを2枚伏せる。そして効果を発動した『ゼラート』はこのターンのエンドフェイズに破壊される」

ゼラートがバリーンといつ音を立てて破壊される。

ミスター

「（このターン、モンスターを全て失ったが、私にはこのリバースカード、『魔法の筒』、『聖なるバリア・ミラーフォース』がある。奴が攻撃を仕掛けてくれば、次のターン私の勝ちが確定する。）

「

十代

「俺のターン！行くぜ！」・エア・ハミングバーード』を攻撃表示で召喚！」

十代の場にエア・ハミングバードが召喚される。

エア・ハミングバード 攻撃力600

十代

「さりに、魔法カード『ミラクル・コンタクト』を発動！ フィールド、または墓地から、『ネオス』を融合素材とする融合モンスターによつて決められたモンスターをデッキに戻し、『ネオス』を融合素材とする融合モンスター1体を融合！ デッキから特殊召喚する！ 僕は墓地の『ネオス』、『アクア・ドルفين』、そして、場の『エア・ハミングバード』をトリプルコンタクト融合！ ！」

十代の墓地から現れたネオス、アクア・ドルفين、そして場のエア・ハミングバードが天へと飛翔する。

なのは

「トリプルコンタクト融合！ ？」

天へと飛翔したネオス達は銀河の中へと消える。

十代

「3つの力が1つとなつた時、はるか大宇宙の彼方から、最強の戦士を呼び覚ます！ 銀河の渦の中より現れよ！ 『E・HERO ストーム・ネオス』！ ！」

十代の場に青い身体に桃色の翼を生やしたネオスが召喚される。

E・HERO ストームネオス 攻撃力3000

十代

「『ストーム・ネオス』の効果発動！ 1ターンに一度、場の全ての魔法、罠カードを破壊する！！」

ミスター・T

「何！？」

ストームネオスが背部の翼から風を起こし、ミスター・Tの伏せカードを吹き飛ばす。

十代

「これで、俺の邪魔をする物は無くなつた！ 行け！ 『ストーム・ネオス』！」

ストームネオスがミスター・Tに向かつて突進し、両腕の爪でミスター・Tを攻撃する。

ミスター・T

「ぐあああつ！…」

ミスター・T LP1200 - 3000 = 0

スバル

「やつたあ！…！」

リイン

「十代さんが勝つたですう！…！」

六課メンバーが十代の勝利を祝福する。

ミスター・T

「くつ……」それほどの力とはな……やはり君は一筋縄では行かないよつだ。退散する前に手土産の一つでも残して置くとするか……」

十代

「何……？」

十代が構えるのと同時にミスター・Tの右腕から黒い霧が無数の槍の形となり、十代達を狙う。

十代

「やらせるか！『ネオス』を召喚……！」

十代がデュエルディスクにネオスのカードをセットするが、ネオスは現れなかつた。

十代

「何……？」

ユベル

「おいどうした！？」

十代

「どうして『ネオス』が……」

十代がデュエルディスクへ視線を落とすとデュエルディスクのライフカウンターの横に何かで斬られた様な後があつた。

十代

「この傷……まさか、あの時黒い奴の攻撃を防いだ時に……」

ミスター・T

「さらばだ！遊城十代！！」

ミスター・Tが黒い霧となつて消えるのと同時に無数の黒い槍が十代達へと向かつていく。

十代はモンスターが召喚できず、六課メンバーは魔法が使えない。まさに絶体絶命だった。

しかし、その攻撃は十代達には届かず、突然現れた黒い穴の中へと消えてしまった。

十代

「この穴、さつきへりへの攻撃を防いだときの……」

十代達が驚いていると、後ろから男の声が響いた。

？？？

「無事見たいだニヤ。十代君」

十代

「その声、まさか……」

十代が後ろを向くと、かつてセブンスターズの一人だつたアムナルの衣装を着た大徳寺先生が立つていた。

十代

「大徳寺先生！――」

大徳寺先生

「よつやくギリ合えたのニヤ。十代君」

十代

「でも、先生。その身体は……」

大徳寺先生

「細かい話は後だニヤ。今は一度機動六課に戻つた方がいいのニヤ」

大徳寺先生と合流した十代達はへりと合流し、一度、六課へと帰還したのだった。

第19話 逆転の「ノンタクト融合」（後書き）

次回は模擬戦の話をやろうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2497t/>

---

遊戯王デュエルモンスターズGX StrikerS

2011年10月7日18時08分発行